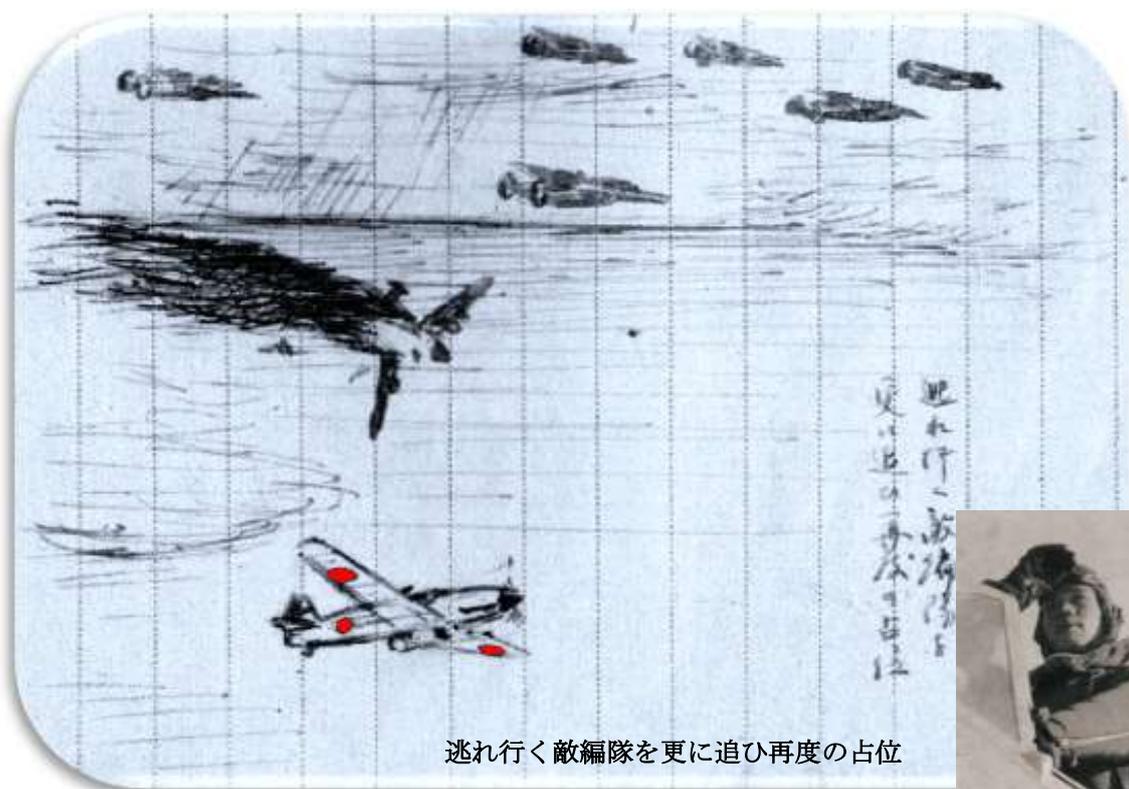


～空を愛した男の死闘譜～

平塚勝 手記



逃れ行く敵編隊を更に追ひ再度の占位



- ニューギニア** 飛行第 78 戦隊
昭和 18 (1943) 年 6 月～昭和 19(1944)年 5 月
- 名古屋** 明野教導飛行師団
昭和 20 (1945) 年 1 月
- 台湾(臺灣)** 飛行第 17 戦隊
昭和 20 (1945) 年 5 月～昭和 20(1945)年 12 月

初版(Initial) 2017.11

V2.03.00 2020.05



PDF 版はこちらから↑

著者(Author) : 平塚 勝 Masaru Hiratsuka
編集者(Editor) : 平塚 滋 Shigeru Hiratsuka s_hiratsuka@hotmail.com

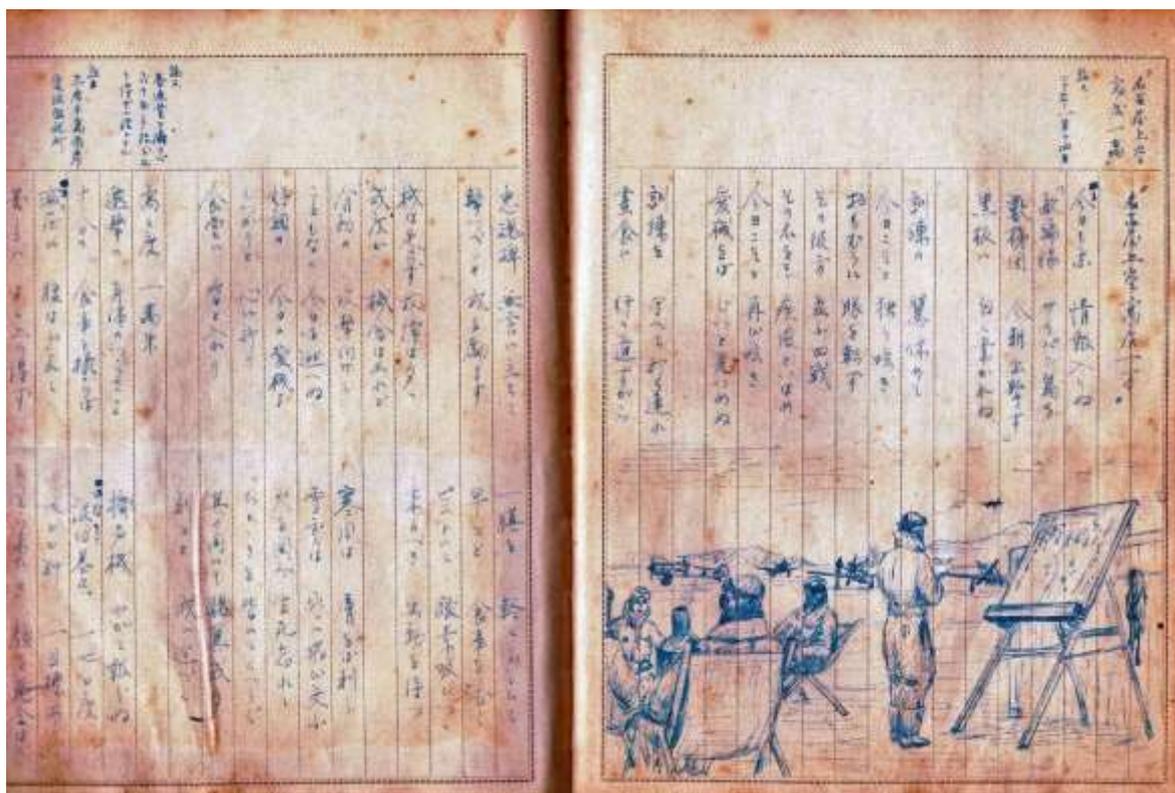
Copyright©2017- Shigeru Hiratsuka. All Rights Reserved.

禁無断転載

はじめに

平成 29 (2017) 年 8 月に宮城県栗原市での叔父 平塚勝 の追悼式 (写真集 平塚勝 p.64 参照) に参列し、そのあとでご遺族の登美子さんに連絡をとったところ、叔父筆の太平洋戦争中の手記の存在を知りました。

手記を一読し、青春を犠牲にした内容に衝撃を受けこれはなんとか今の世代にも残すべきだと考え、手記の全原稿を登美子さん甥の芥生浩隆さんから提供いただき本書を編集しました。



実際の原稿

本手記が航空自衛隊第 4 航空団で操縦訓練生の教材になります。

1956 年 6 月に航空自衛隊第 2 操縦学校の教官として訓練飛行中に隣機と空中接触・墜落、殉職した叔父の「操縦士を育てたい」遺志が引き継がれていきます。

青雲の果てで叔父が微笑んでいます。

2019 年 1 月 平塚 滋記



内容

序	昭和 18(1943)年	飛行第 78 戦隊.....	3
出陣	昭和 18(1943)年 6 月	飛行第 78 戦隊.....	4
ラバウルに至りて	昭和 18(1943)年 7 月.....		6
前線基地	昭和 18(1943)年 7 月.....		8
血戦	昭和 18(1943)年～昭和 19(1944)年.....		9
防空壕にて	昭和 18(1943)年 10 月.....		11
ニューギニア	昭和 19(1944)年 2 月.....		12
三月十一日	昭和 19(1944)年 3 月.....		15
～～～<夜更けて>～～～			15
～～～<小型機来襲>～～～			16
～～～<第二波来る>～～～			19
～～～<被弾>～～～			20
～～～<死闘>～～～			24
～～～<再び夜更けて>～～～			27
ウエワクを去る	昭和 19(1944)年 5 月.....		28
名古屋上空高度 1 万	昭和 20(1945)年 1 月	明野教導飛行師団.....	30
特攻隊を送る	昭和 20(1945)年 5 月	飛行第 17 戦隊.....	37
最後の飛行	昭和 20(1945)年 12 月.....		40
後記.....			44
編集後記.....			47
参考資料.....			47
写真集.....			48
飛燕	2017.11	かがみはら航空博物館.....	48
修武台記念館(航空士官学校跡、現航空自衛隊入間基地内).....			50
陸軍明野飛行学校(現陸上自衛隊明野駐屯地).....			51
ウエワク.....			54
平塚 勝.....			55

凡例：(※) は手記中の注記

() は編集者追記

[] は手記中ルビ

数字は一部アラビア数字に変更

本文中の写真・絵は断りない限り手記より切

旧字体は一部新字体に変更

り抜き

注： は編集者注記

序 昭和 18(1943)年 飛行第 78 戦隊¹

ハルビン^たを発つ朝は零下二十度なりき。

フサン^つに着きしは桜の花の散り初めしときなり。

あけの^{こうたいじんぐう}明野²につきて皇大神宮³に参拝せしとき参道の

両側^{やえざくら}の八重桜は盛りなりき。

か^{いわ}斯くて当時最新鋭と云はれし キ 6 1⁴ に機種改変し

修習訓練六十余日。

ひざし^{なか}陽射も強き六月の半ば

ごうおん^{あけの}轟音と共に愛機キ 6 1、288 号⁵は明野を発ちぬ。

か^{ぜんはんせい}斯くてわが前半生を賭けし死闘譜は始まりぬ。



キ 61 飛燕(1 型甲) 飛行第 78 戦隊第 2 中隊
昭和画法 <http://www.gahoh.net> より

キ 6 1 飛燕 諸元 :

全幅	12.00m
全長	8.74m
全高	3.70m
全備重量	約 3,200 kg
発動機出力	約 1,100 馬力
最高速度	約 580 km/時
航続距離	約 1,100 km

¹ 注: 第 4 飛行師団(4FD)・第 14 飛行団(14FB)・飛行第 78 戦隊(78FR) (当時)

航空士官学校 55 期(航士 55 期)から飛行第 78 戦隊への配属は次の 4 名

平塚勝、木村正(19. 9. 25 没)、末光弘(18. 7. 23 没)、荒田旭(17. 10. 24 没)

² 注: 明野 - 明野陸軍飛行学校(三重県伊勢市小俣町明野) 現陸上自衛隊明野駐屯地

³ 注: 伊勢神宮 内宮(ないくう) (三重県伊勢市宇治館町)

⁴ 注: キ 6 1 - 三式戦闘機 飛燕(ひえん)

⁵ 注: キ 6 1 I 甲 川崎航空機 岐阜工場にて 1943 年 5 月に製造

出陣

昭和 18(1943)年 6 月

飛行第 78 戦隊

懐^{なつか}しの 緑島^{みどりしまやま}山
紺壁^{こんぺき}の 瀬戸^{うらうみ}の内海
爆音^{はつおん}は 山^{たにま}や溪間^にに
研^{こだま}しつ 鵬翼^{ほうよく}は 征^ゆく
南溟^{なんめい}の 空^めを 眼^め指^さして

吾^{われ}空^{そら}に 生^{せい}享^{じやう}けてより
血^ちの に じむ 練磨^{れんま}重^{かさ}ねて
幾^{いく}人^{たり}の 戦友^{せんゆう}を 失^うしな
血^ちと 共^{とも}に 築^{きず}く 翼陣^{よくじん}
今^こ此^こ処^こに 征衣^{せいゐ}を まとひ
轟^{ごうごう}々と 天翔^{あまかけ}り ゆく

懐^{なつか}しの 明野^{あけの}よさらば
神風^{かみかぜ}の 伊勢^{みやい}の 宮居^{みやい}を
機上^{きじやう}より 俯拝^{ふしおが}みつゝ
唯^{ただ}一^{いち}路^ろ 南^{なん}の 空^{そら}へ

夏^{なつ}空^かに 光^{ひか}る 銀翼^{ぎんよく}
俊^{しゆん}鋭^{えい}の 愛機^{あいせん}三^{さん}戦^{せん}
幾^{いく}年^{ねん}の 練磨^{れんま}の 腕^{うで}を
振^{ふる}はむと 競^きふ 隊員^{たいえん}
いざさらば さらば 祖^そ國^{こく}よ
永^{とこ}遠^{しえ}へに 榮^{さか}え あれかし

日^かを 重^{かさ}ね 夜^{よる}を 重^{かさ}ねて
鵬翼^{ほうよく}は 進^{すす}みに 進^{すす}む
九州^{きゅうしゅう}に 更^{さら}に 沖繩^{おきなわ}
越^こえ 行^いきし 新高^{にいたか}の 峰^{みね}
バシー海^{ばしーかい} 何^い時^つしか 過^すぎて
機^きは 進^{すす}む マニラ^{まにら}の 空^{そら}へ

灼^{しやく}熱^{ねつ}の 陽^ひに 輝^{かがや}きつ
南^{なん}海^{かい}の 雲^{うん}を ば 越^こえて
花^{はな}の 街^{まち} 主^{しゅ}都^との マニラ^{まにら}の
空^{そら} 越^こえて 向^むかふ 南^{なん}海^{かい}
目^め的^{てき}の 決^{けつ}戦^{せん}場^{じやう}は
猶^{なほ}遙^{はる}か 道^{みち}や 幾^{いく}千^{せん}
操^{そう}縦^{じゆう}桿^{かん} 無^む心^{しん}にとりて
唯^{ただ}一^{いち}路^ろ 戦^{いく}さの 空^{そら}へ
鵬翼^{ほうよく}は 天翔^{あまかけ}り ゆく
塵^{ちり}の 世^よの 生^{せい}死^しを 知^しら ず
只^{ただ}管^{くだ}に 空^{そら}に 生^いき んと
若^わ人^{にん}の 血^ち潮^{うしほ}を の せ て

翔^かり 行^いく 翼^{よく}に 幸^{さい}あ れ
一^{ひと}片^{ひら}の 翼^{よく}に 命^{いのち}を
託^{たく}し 行^いく 男^{おの}児^こぞ 我^{われ}等^ら
國^{こく}民^{みん}の 期^き待^{たい}に 添^そひ て
大^{だい}空^{くう}の 先^{せん}駆^くと なり つ
華^{はな}と 咲^さき 華^{はな}と 散^ちり な む

故^{ふる}郷^{さと}や 雲^{くも}波^{なみ}幾^{いく}重^{えい}
遙^{はる}けくも 来^きつ る もの かな
果^はて 果^はし な き 南^{なん}海^{かい}の 波^{なみ}
輝^{かがや}ける 白^{しろ}銀^{ぎん}の 雲^{うん}
美^うは し き 光^{ひか}り 映^{うつ}し て
今^い行^いか む 戦^{いく}の 空^{そら}へ
我^{われ}よ く ぞ 男^{おの}児^こに 生^うま
天翔^{あまかけ}る 翼^{つばさ}を 持^もて る
翼^{よく} 連^{つら}ね 行^{ゆく}手^てみ つ め て
唯^{ただ}無^む心^{しん} 機^きを 操^{あやつ}り ぬ

⁶ 注：南の果て

⁷ 注：兵士が戦争に行く時の服装

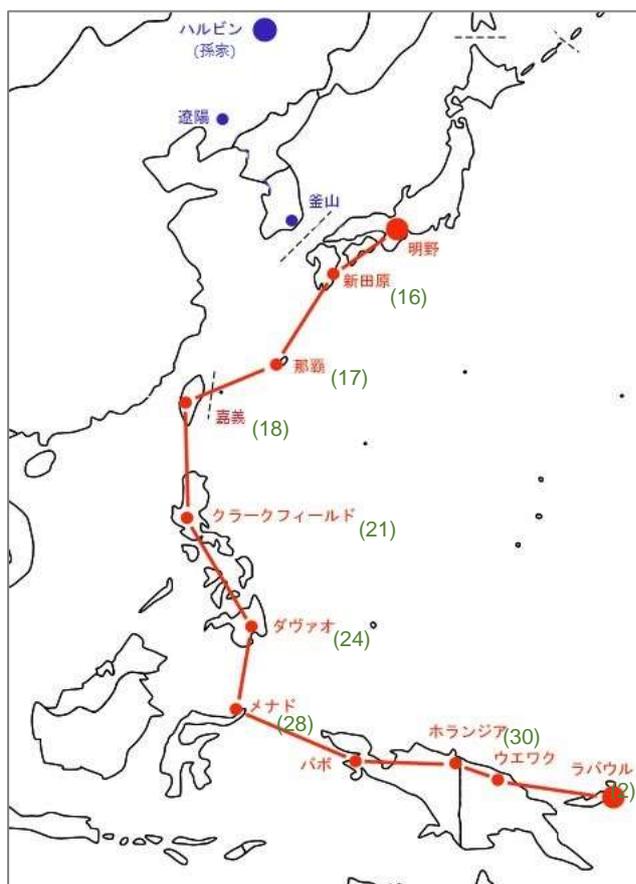
⁸ 注：飛行機の翼

⁹ 注：台湾 玉山。標高 3,952m。日米開戦の『ニイタカヤマノボレ』のニイタカヤマは当山。

昭和十八年六月十五日 明野発 注：1943年

飛行団長 立山大佐¹⁰(陸士31期)
戦隊長 高月少佐¹¹(陸士44期)

明野→新田原(九州) →那覇→嘉義(台湾)→クラークフィールド(ルソン)
→ダヴァオ(ミンダナオ) →メナド(セレベス)→バボ(ニューギニア) →ホランジア¹²(〃)
→ウエワク(〃) →ラバウル(ニューブリテン)¹³



()内は到着日

4月4日	駐屯地帰還のため遼陽出発	孫家着
6日	機種変更のため明野陸軍飛行学校に派遣を命ず	孫家出発
8日	鮮満国境安東を通過 注:「安東」は現在の丹東	
11日	釜山港出発	下関上陸
12日	明野着	
5月29日	南方派遣下令	
6月16日	明野発	新田原着
17日	新田原発	那覇着
18日	那覇発	台湾嘉義着
21日	嘉義発	比島クラークフィールド着
24日	クラークフィールド発	ミンダナオ島ダバオ着
28日	ダバオ発	セレベス島メナド着
30日	メナド発	ニューギニア島ホランジア着
7月2日	ホランジア発	ニューブリテン島ラバウル着

(兵籍簿より)

¹⁰ 注：立山大佐 - 第14飛行師団 立山武雄
写真は「陸軍航空士官学校」より

¹¹ 注：高月少佐 - 高月光 18.12.22 ウエワク没

¹² 注：ホランジア - 現在のジャヤプラ。

¹³ 注：明野・ラバウル間 直線飛行距離約8,600km

明野出発 45機、7月5日までにラバウル西飛行場着 33機。参考資料(p.48)「幻」より
「日本陸軍戦闘機隊」によると出発45機、7月15日にウエワクに移駐



大佐 立山 武雄 (31期)

ラバウルに至りて

昭和 18(1943)年 7 月

濛々たる砂塵の蔭より
現れし鵬翼は
静かに地を滑りて 掩体の前に止まりぬ
降りたちし 一人の若人
更に一機 砂塵を捲いて行く三戦
その濛々たる中より
手を高く打振りて 近づきし戦友¹⁴
ピンチピンチと叫びて来りぬ

此処南海の基地 ラバウル
幾千里 海山越えて
遙けくも 来つものかな
翼より 降り立ち見れば
戦友は来りて 手をうちとり
待ってゐた 待ってゐた と繰り返しぬ

先日は重爆¹⁵一挙七機を失ひ
更に又 陸攻幾多征きて還らず
今基地に残れるは僅かに〇〇(原文ママ)機のみ
補給少く 消耗多く
敵レンドヴァ¹⁶に上陸すとも
討ち撃たんに機数は足らず
ピンチピンチと繰り返しぬ

砂塵を浴びし飛行帽を
静かに脱ぎて汗ふきぬ
此処ぞこれ吾等が命 大君に捧ぐるの土地
振りかへり愛機を見れば
たくましき我が翼かな
俊鋭の新戦闘機は
南海の強き陽射に 輝きて命をば待てり

此の翼 よくぞ翔りて
万里をば 越え来しものぞ
バシー海 呂宋の空や
ミンダナオ 更にセレベス
赤道を越えて遙々
ニューギニア その西端より東端へ
更に今此処ニューブリテンの東端へ
故郷を 發ちて幾日
よくぞ我 越えて来たれる

黎明に大地を蹴って 或は又
降りしきるスコール潜り 或は又
盛り上る積乱雲の峯越えて
戦友の待つ此処南海のラバウルへ
飛び飛びて遂に来りぬ

其処此処に 戦ひ疲れ
よくこれで 戦闘し得と
思はるるが如き 隼¹⁷の数々
数と性能を恃む敵に
此の機にて打ち向ふ丈夫の心や壮なる
唯訓練を頼みて
裸にて短刀かざし
長槍を持ちて鎧を着
騎乗せし武者に向ふが如し
されど我日本男子よ
敵如何に武装頼むも
必殺の 闘魂沸り 圧倒す戦の数々

14 *1: 大貫中尉(航士 55 期) 68FR 注: 飛行第 68 戦隊 大貫明伸
15 *2: 飛行第十四戦隊
16 注: レンドヴァ - ソロモン諸島 6 月 30 日に連合国軍が上陸、占領
17 *3: 飛行第一戦隊

されど機は いたく疲れて
此処基地にあへぎて休む
新鋭の 我が戦闘機
近き日に 君等と代り
群敵を 蹴散らかしなむ

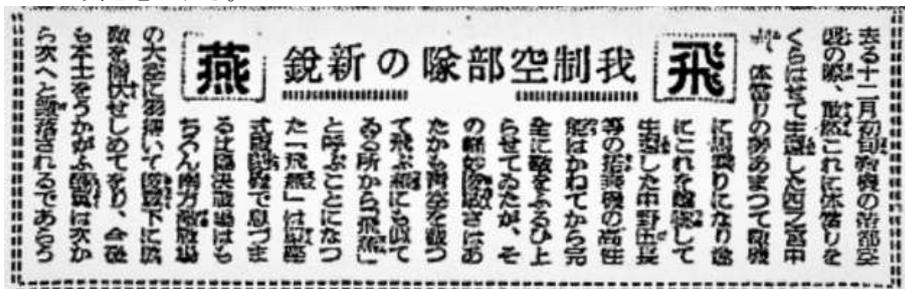
今や我 此処遙かなる
南海の基地 ラバウルに
大空を 望みてぞ立つ
砂埃り 何時しか静まり
飛行場 夕日に映ゆ
散り行きし 幾多の戦友の
その血潮 映すが如くに

昭和十八年七月二日着



「ニューギニアに於ける愛機三戦」(手記より)¹⁸

¹⁸ 注: 写真は手記より。昭和 20(1945)年 1 月 16 日付 朝日新聞 『飛燕 我制空部隊の新鋭』記事中の写真と思われる。



飛燕 我制空部隊の新鋭

去る 12 月初旬敵機の帝都空襲の際、敢然これに体当りをくらわして生還した四之宮中尉、体当りの勢あまって敵機に馬乗りになり遂にこれを撃墜して生還した中野伍長等の搭乗機の高性能はかねてから完全に敵をふるい上がらせていたが、その軽妙俊敏さはあたかも青空を縫って飛ぶ燕にも似ている所から「飛燕」と呼ぶことになった。

「飛燕」は単座式戦闘機で息詰まる比島決戦場はもちろん南方激戦場の大空に羽搏(はた)いて俊翼下に?敵を?伏せしめており、今後も本土をうかがう醜翼は次から次へと蹴落とされるであろう。

四宮徹 (航士 56 期) 昭和 19(1944)年 12 月 3 日 B-29 に体当り・撃墜。昭和 20(1945)年 4 月 29 日 第 19 神武隊長として沖縄で特攻戦死。

前線基地

昭和 18(1943)年 7 月

椰子の葉蔭
油にまみれた整備員
宿舎に帰る操縦者
その面はやつれ 体^[からだ]に力なく
眼のみぞ光る

此処基地 ウエワーク¹⁹
連続出動の疲労
神経と体力の
高度の消耗
如何に頑健な体も
半月にて消耗し盡すとの
言葉も宜なり²⁰
一出動毎に友は減り
遺品のみ 空しく姿す

されど
第一線地上部隊の
苦痛や 思ふべし
身をすりへらす出動も
たゞ 大命
されど
極度の疲労に
徒らに出す犠牲の多きよ
それを癒すの何物もなく
愛機より
帰る足どりの重さよ
雨降れば
雨漏りて 寝ねもせず
風吹けば 灯 消えて
泥くさき水すすりつゝ
戦ひに今日も飛びたつ
前線の基地 ウエワーク



¹⁹ 注：ウエワーク — ニューギニア北部の地区。7月15日にラバウルより転進。

p. 55 ウエワーク 参照

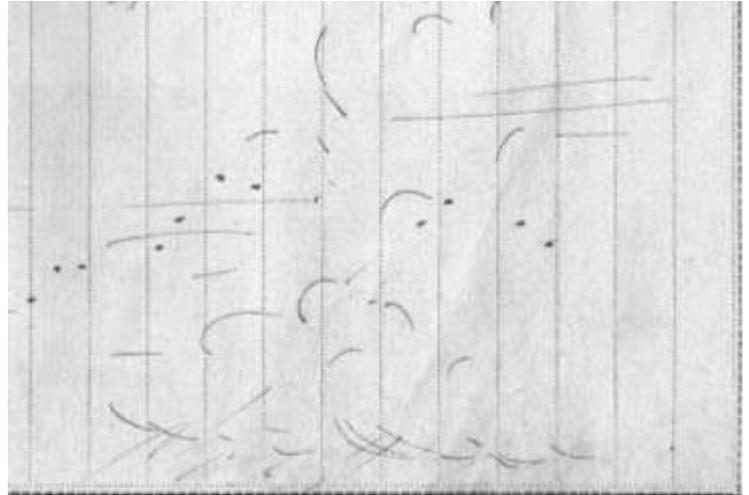
²⁰ 注：もっともである。

血戦

昭和 18(1943)年～昭和 19(1944)年

げに²¹疾^{はや}きかな ひとゝきの
まばたく^[いとま]暇 あらばこそ
機はあちこちと 飛び^か交いて
空に^{あや}綾なす 死の^{かせん}火箭

澄^すみわたりたる 南海の
極^{きわ}み知らざる 空の^{ほて}果
まばゆく^{ひか}光る 白銀^{しろがね}の
積^つ乱雲を 血で^ち染めつ
噫、^{ああ}死闘する 旭日^{きよくじつ}機



後^{あと}より迫^{てきかげ}る敵影^{てきかげ}を 巧^{たくみ}に^き避ければ 此方^{こちら}より
空も真紅^{しんく}に降りかゝる 箒^{ほうき}の如^{ごと}き火の^{あられ}霰
側面^{あがや}反転^{あがや} 鮮^{あざや}かに 突差^{とつき}にそれを回避^{かい}しつ
息^{いき}つく暇^{いとま}なき急突進^{きゅうとくしん} 眼下^{がんげ}の敵機^{ていき}追^おひつゝも
側^{そば}より来^{きた}る敵影^{てきかげ}に 又も^{また}眼前^{がんぜん}火の嵐^か
避^さけつゝ上昇^{じやうじやう}急旋回^{きゅうせんかい} 歯^はを喰^くいしばり急激^{きゅうげき}の
遠心力^{こらえ}を耐^たへつゝ 更^{さら}に四周^{ししゅう}を索敵^{さくてき}す

速度^{さくど}計指^{さし}す 五百^{ごひゃく}軒^{けん}
廣^{ひろ}きが如^{ごと}き 大空^{おおぞら}も
翼^[つばさ] 触^ふれなん ばかりなり
上^{うへ}よ 後^{うしろ}よ 右^{みぎ}左^{ひだり}り
光^{ひか}りを受けて 舞^まふ翼^う

有効^{ゆうこう}なりし突撃^{とつげき}の 効果^{こうか}見極^{みきわ}む暇^{いとま}もなし
左右^{さゆう}に迫^{せま}る敵影^{てきかげ}を 垂直^{ていじつ}旋回^{せんかい} 漸^{ようや}くに
危地^{あち}を脱^{だつ}して振り向けば あゝそは敵^{てき}か友軍^{ゆうぐん}か
火^かを吹^ふきて散^まる機^きの姿^{すがた} 眼^めにうつると思^{おも}う間^まに
あなや危^{あぶな}し友軍^{ゆうぐん}機^き 赴^{おもむ}く援^{えん}突^{とつ}嗟^さに間^まに合^あひて
電鍵^{でんけん}押せば四門^{よんもん}の 機銃^{きじゆう}一時^{いちとき}に雄叫^{おたけ}びつ
敵胴体^{てきどうたい}に炸裂^{さくれつ}の 火花^{あか}も紅^{べに}し至近距離^{しじんきり}

²¹ 注: 実に

其の墜ちしやも又知らず 不図後方に殺気をば
感じ必死の急旋回
間髪入れず翼下をば 過ぐる火箭の幾條ぞ
息をば呑みて見返れば 更に機首をば火にそめて
我に迫れる敵機影

噫、天翔る 益荒夫の
至高の藝術 示さんと
汚れ知らざる 南海の
光り輝く 雲の上
赤き血潮に 惜しみなく
今日又描く 死の乱舞

あな 美しいの 悲愴調
紺壁深き 大空に
聳りて立てる 白銀の
輝きわたる 雲の塔
これぞ我等を 葬らんと
神の建てにし 墓ぞ

此処故郷や 波幾重
赤道越えし 南海に
翼操つる 我等こそ
榮ある空の 防人ぞ
今日又奇しくも²² 長らへて
愛機の翼 さすりつゝ
爆音絶えし 大空を
眺めてひとり 謳ふかな
あゝ 旭日の 征空譜



ホランジアの飛燕 1943-1944 年



ウエワクで攻撃を受ける飛行第 78 戦隊の飛燕 1944 年

Ki-61 Hien (Tony) of the 78th Sentai under attack Wewak New Guinea 1944

www.worldwarphotos.info より

²² 注：不思議にも

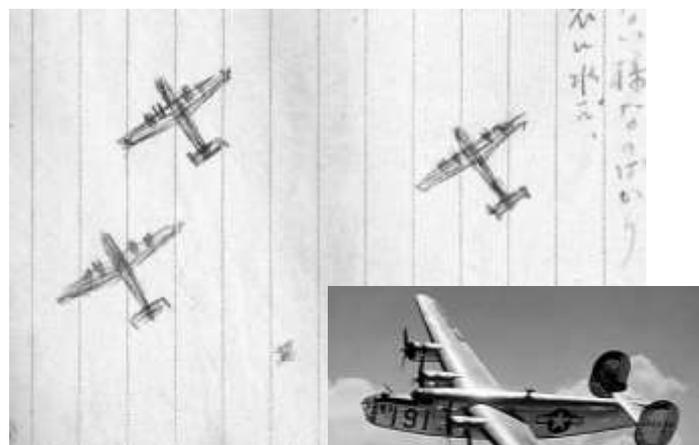
防空壕にて

昭和 18(1943)年 10 月

重々しい爆音が近づく B24 の大編隊だ
聴^{やが}て高射砲の音が起^{おこ}る
糞^{くそ}っ、飛行機が欲しい
戦闘機搭^のりが此^この空襲^{くわう}に
何事^{なにごと}だ 防空壕^{ぼくごう}の中^{ちゆう}に居^いるとは
ジャングルの中^{ちゆう}から僅^{わずか}に見える空^{そら}を
ちらりと黒い機影^{きえい}が過^{よぎ}る
空中戦^{くわうちゆうせん}の音がする P38 の音だ
ザーつと風^{かぜ}を切る音
大地^{ちゆうち}を揺^ゆする炸烈^{さつれつ}音
逃げ^かれも陰^{かげ}れも出来ぬ海岸^{かいがん}沿^そひの
猫^{ねこ}の額^{ひたい}の様^{よう}な此^この基地^{きち}へ
来る^くる波^{なみ}の様^{よう}に 雲霞^{うんか}²³の様^{よう}に

あゝ我^{われ}には
消耗^{しょうしょう}した操縦^{そうじゆう}者の
その半分^{はんぶん}しか機数^{きすう}がない
残念^{ざんねん}だ、早くよい機^{たかさん}が沢山^{たくさん}出来ぬか
来^きてもすぐ作戦^{さくせん}に使^{つか}へない様^{よう}なのばかり
それも僅^{わずか}かに数機^{すうき} 焼石^{やけいし}に水^{みづ}だ
又^{また}爆音^{ばくおん}、飛行場^{ひこうじやう}らしい
防空壕^{ぼくごう}の壁^{かべ}が崩^{くずれ}れる
首筋^{くびすぢ}に土^{つち}が入^いる
飛行機^{ひこうき}だ 飛行機^{ひこうき}だ
猶^{なほ}も頭上^{かぶ}に爆音^{ばくおん}が續^{つづ}く

(P38)



(B24)



Wikimedia Commons より



B-25 raid. Wewak. August 13, 1943.

warhistoryonline.com より

²³ 注: 軍勢が多いことのたとえ

ニューギニア 昭和 19(1944)年 2 月

空暗く 雲は乱れて

南溟²⁴の 海はけぶりぬ

舞上る 隼 飛燕

其処此処に 群をつくりて

敵機をば 邀へ撃たむと

一散に 雲をば縫へり

乱雲を 縫ひて進める

大型機 編隊の群

友軍機 次から次へと

敵群に 突入し行く

眼前に 幕なす雲を

経巡りて 我等が隊は

今正に 右旋回の

敵軍の 右前方の

近距离に 占位ぞなせり

瞬間に 機数を見れば

敵一機²⁶ 既に缺けたり

絶対の 優勢恃む

敵機また 今日も来れる

見よ彼方 雲の断れ間に

隠見す 粒なす数々

雨雲は 全天覆いて

凄惨の 氣漂へり

幾度の 激しき出動

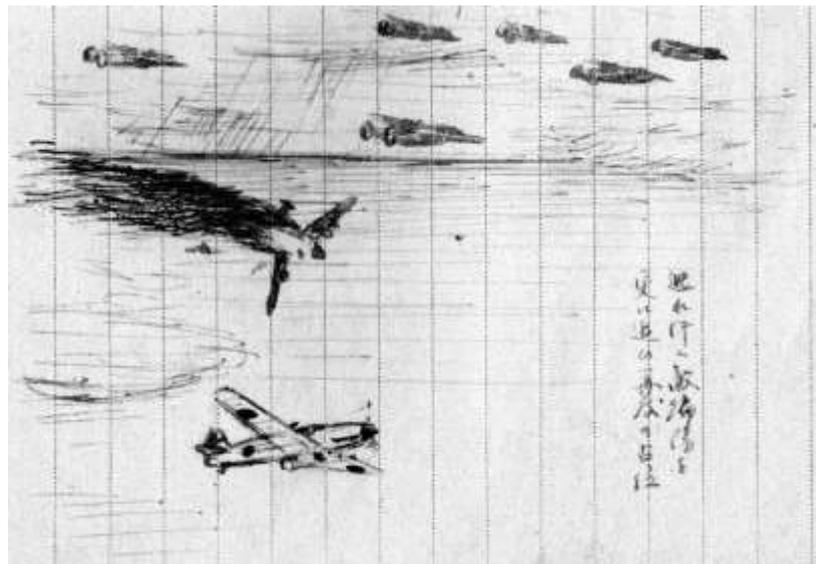
機はなべて いたく疲れて

我部隊 僅かに四機²⁵

他部隊と 相協同し

群なせる 敵編隊の

行手へと 機首をば向けぬ



「逃れ行く敵編隊を更に追ひ再度の占位」

²⁴ 注: はるか南

²⁵ *1: 倉矢大尉 長機、相子軍曹 僚機

平塚中尉 二分隊長機、斉藤准尉 僚機

注: 倉矢大尉 - 倉矢寛(航士 53 期) 19. 8. 5 ホランジア没

相子軍曹 - 相子晋作 (少飛 6 期)

19. 1. 18 敵機と空中衝突、2 日後生還

小山進著 あゝ飛燕戦闘隊 p. 108, p. 198-209

三浦泉著 少年飛行兵「飛燕」戦闘機隊 p. 106

斉藤准尉 - 斉藤正午 (少飛 2 期) 19. 8. 9 ウエワク没

「広瀬院長の弘前ブログ: 斉藤正午」

http://hiroseorth.blogspot.jp/2007/02/blog-post_18.html

²⁶ *2: 十機編隊が九機となれり

長機今 翼を振りて
攻撃は 下令されたり
編隊の 側方目指し
突入す 長機、二番機
我更に 前方扼し
敵軍の 前下方へと
右旋回 急遽向ひぬ
距離近く 速度は速く
一瞬の 操舵失せば
有効の 攻撃なし得じ
距離五百 左旋回
敵機首は 一斉に火吹きて
曳火弾 眼を射れど
梓弓²⁷ 引くに引かれじ
血ばしりし 眼ひらきて
眼鏡に 今や捕捉す

大型機 Bの二十四
距離既に 二百数十
間髪を 入れずに我が砲
一斉に 火蓋開けり
轟然と 響く^[マウザー] 28
次々と 彼が胴体に
炸裂の²⁹ 赤い火花を
散らせりと 思ふ間あらず
すれすれに 彼と飛び交ひ
急操作 側面反転
霰^{あられ}なす 防御火網の
中抜けて 如何にと見れば
今彼は 翼の付根に
濛々の 大煙をあげて
落下傘³⁰ 二つ三つ四つ
次々と 空に開けり

²⁷ 注: “引く”の枕詞。神事などで使われる梓の木で作られた弓
あづさ弓引けど引かねど昔より心は君によりしものを(伊勢物語)

²⁸ *3: 独乙製二十耗モーゼル

注: マウザー (Mauser)社 MG151/20。特殊な弾薬を使用していたため破壊力が大きかった。
800挺と弾薬約40万発が潜水艦で輸入され、飛燕1型丙に搭載される。1943年12月にウエワクの
飛行第78戦隊にマウザー砲装備済の新鋭機と、改造用の砲が配備された。(Wikipedia)
飛燕1型丙は1943年8月より製造開始、胴体に12.7mm砲(ホ一〇三)、主翼に20mmマウザー砲を
装備。

²⁹ *4: 20耗命中せば直径一米程の火花出づ 約十五、六発命中す(発射弾約四十)

³⁰ *5: 落下傘 十一降下す

雲黒く 雨を呑みて
鉛なす 南海の波
彼が機影 今は沈みて
黒煙り 天に柱す
逃げ行く 敵編隊を
更に追ひ 再度の占位
空蔽ふ 赤き火網の
中くゞり 電鍵押せば
しなしたり³¹ 弾は出行かず
敵影は 風防蔽へど
胴体の 十三耗砲
発射せる 僅かに三発
操縦席 眼近くに眺め
すれ違ひ 右急反転
無念ぞと 思ひて敵を
見つめつゝ 機首を起こせば
機はいたく 右に傾き
こは如何に³² 右の補助翼
大いなる 穴はあきたり

操縦桿 左に一ぱい
漸くに 水平にしつ
基地向けて 帰らんとなし
無電にて 情報聞けば
基地近く³³ 敵中型機
迫り来て 着陸待てと
雲遂に 雨を齧らし
傷きし 我が翼をば
つぎつぎと 濡し行きにき
困難の 飛行重ねて
猶然ゆる 海上を見つ
着陸の 無線を受けて
今日の日 戦の幕を
閉ちんとぞ 基地に向ひぬ
整備員 駆け来れるを
微笑みて 翼を指せば
彼いたく 打驚きて
今日の日 経過を問ひぬ
答へつゝ 機より下り立ち
飛行帽 そば降る雨に
濡らしつゝ ピスト³⁴に帰る

今日の日³⁵ 戦さ終れり
日を重ぬ 激しき戦さに
幾機かの 生霊呑みし
南溟の 空は小暗く
暗澹と 打ち沈みつゝ
ひそけくも³⁶ 暮れ行かんとす

*昭和十九年二月（日は不明）

³¹ *6: 弾帯排出不良の為 20 耗発射せず
胴体の 13 耗左砲故障、発射せるは右のみ、至近距離の為三発しか発射せず。
注: しそんじた. しくじった
³² *7: 補助翼のため衝撃なし、離脱時に被弾せしならん
³³ *8: 「スコール」の幕の為 基地に侵入し得ざりしもののごとし
³⁴ 注: 操縦士控え所
³⁵ *9: 総合戦果 撃墜 6 損害 なし
³⁶ 注: ひそかに、目立たぬように

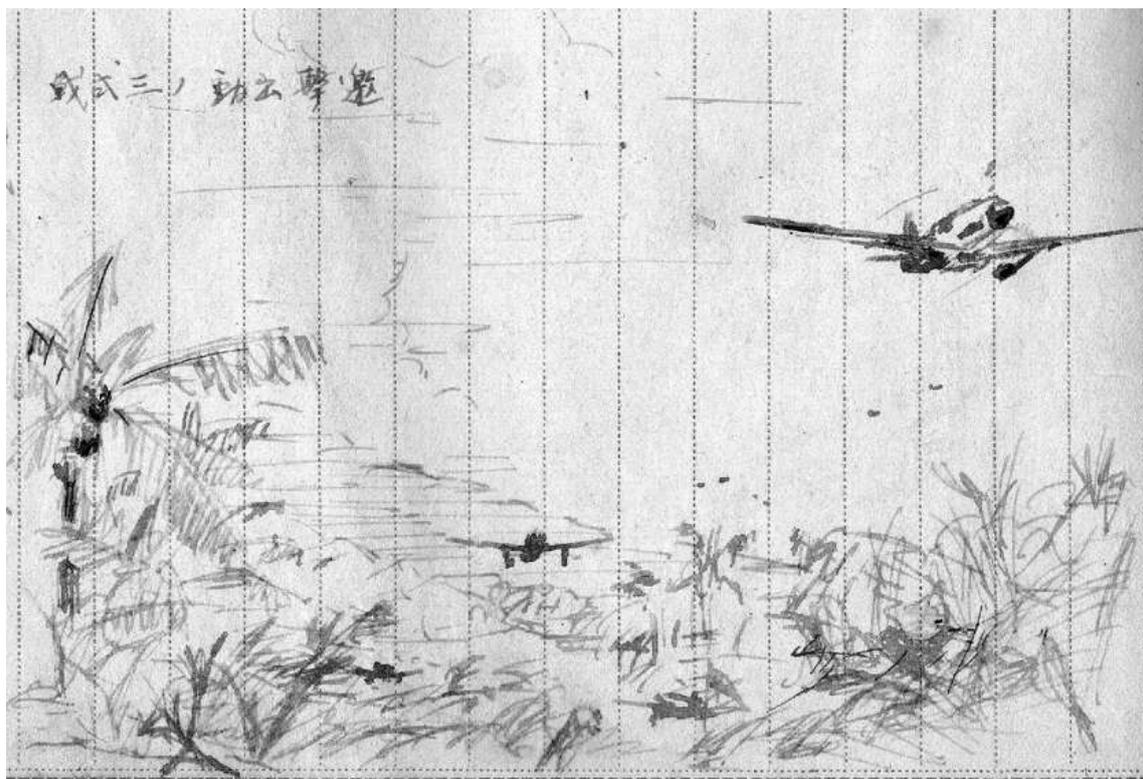
三月十一日

昭和 19(1944)年 3 月

～～～夜更けて～～～

傷^{きず}けり 今日の戦^{いく}さに
顔面^{かめん}と 四肢^{しし}は真^ま白^{しろ}の
繃^{ほう}帯^{たい}に 包^{つつ}まれてあり
心^{しん}身^{しん}は いたく疲^{つか}れて
身^み動^{うご}きも 思^{おも}ふに任^{まか}せず
ひきつれる 肢^{あし}の疼^{うづ}きに
覺^{おぼ}えずに 呻^{うめ}きもらせり
混^ま乱^{らん}と 興^き奮^{ふん}激^{げき}しき
胸^{むね}中^{ちゆう}に ふりかへりみる
今日^{けふ}の日^ひの 戦^{いく}さの跡^{あと}や
我^{われ}よくぞ 命^{いのち}を得^えたる

あゝ我^{われ}は 生^いきてありけり
おもむろに 眼^{まなこ}ひらきて
眺^{なが}むれば ジャングルの中
昼^{ひる}間^{かん}なほ 陽^ひの眼^め見えざる
仄^{ほの}暗^{くら}き 我^{われ}が宿^{しゆく}舎^{しゃ}なる
今^{いま}闇^{やみ}に 全^まくとざされ
戦^{せん}友^{ゆう}は 傍^{かたえ}へにつきて
灯^{ともしび}に うち照^あらされつ
如^い何^かにぞと 我^{われ}を見^み守^{まも}る



ようげき
「激撃出動の三式戦」

～～<小型機来襲>～～

電話報じぬ 「コバ上空³⁷

P四十七 四十機

高度四千 西北進」

互ひに見交す 微笑や

「どれ又一つ」と 立ち上り

かぶり直ほせり 飛行帽

今日又晴れし 南海の

極み果てなき 大空よ

遙かに画く 一線の

紫けむる 水平線

眼下に浮ぶ 涯しなき

大島これぞ ニューギニア

緑波なす ジャングルの

中に上れる 薄煙り

今我が離陸の 砂塵なれ

洋上遙か 集結の

上昇續く 其の間にも

無線は報ず 「基地上空

P四十七 四十機

高度六千 旋回中」

我が基地上空 機影なし

敵思ひつく 高度をば

五千に下げて 旋回す

洋上遙か 二十籽

基地離れつゝ 態勢を

整へたりし 我が部隊

戦機や熟すと 今上に

翼を基地に 廻らしぬ

早くも襲ふ 隼³⁸の³⁹

群に混乱 始めたる
敵機の上に 高速の
翼躍れり 我が部隊

逃げ惑ひたる 敵群の

狂へる火網 躲しつゝ

疾風の如き 急降下

死闘の末に 会得せし

修正量も 無意識に

電鍵押せば 四門の

機銃一時に 雄叫びて

曳火弾の 消ゆるところ

早くも敵は 一條の

白煙空に 引きにけり

座席故障に 突進を

止むなく中止 上昇し

故障なほしつ 見渡せば

藍を流せる 海上に

眞白に描く 数々の

敵撃墜の 水煙り

眼移せば 其の彼方

白煙吹きつ 逃げ行くは

我が襲ひにし 敵機なれ

彼が基地へは³⁹ 得帰らじ

かく思ひつゝ 眼下をば

見れば逃るゝ 敵影を

急追し行く 三式戦

今機首の銃 火を吹きて

五十米 至近距離

敵の機体は 見る中に

撃破さりたり 銃弾に

³⁷ *1: 監視哨 基地より二百籽

³⁸ *2: 飛行第三十三戦隊

³⁹ *3: 撃墜と判定さる



今空戦は 絶頂の
峠を越えて 敵既に
はや遁走を 開始しぬ
今左下 千五百
一戦一機 逃れ行く
敵一機をば 追ひ行きぬ
されど速度は 及ぶなく
遙かに離る 距離二千

これ絶好の 目標と
上下左右を 警戒し
遁げ行く敵の 直上へ
中空高く 我が翼
風をば切りて 舞ひにけり

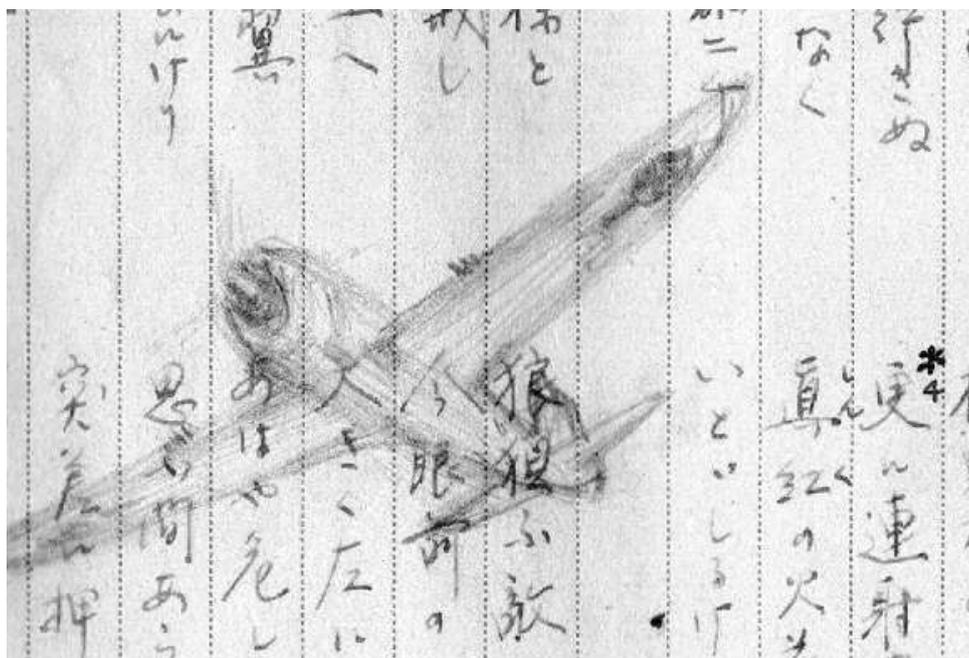
後上方の 軸線に
吸はるが如く 迫り行く

六百糎の 高速度
見よ うなり行く銃弾は
敵胴中に 炸裂す
周章てて回避す 敵影を
機動巧みに 追躡⁴⁰し
更に連射す⁴¹ 至近距離
真紅の火花 あちこちに
いとゞしるけく 見えにけり

狼狽ふ敵は 失速し
今眼前の 空蔽ひ
大きく左に 反転す
あはや危し 衝突と
思ふ間あらず 操縦桿
突嗟に押へし 頭上をば
一米も 離れしか

⁴⁰ 注：追跡

⁴¹ *4：命中弾二、三十は確実に認む 13 糎は直径 50 糎程の火花を出す



彼が左翼 過ぎ行きぬ
覺えずはつと 息のみし
一瞬の隙 彼が敵機
数多の傷を 負ひつゝも
今や必死の 急遁走
遅れたりやと 歯がみしつ
機首をば向けて 急追す
速度計指す 五百料
エンジン叫び 風なりぬ

ピストに帰り 打ちつれ立ちて
戦闘経過 報告なしぬ
友軍損害 一機もあらで
敵少くも 十機は墜ちぬ
されどなかなか 燃えぬ敵ぞと⁴²
語り合ひつゝ 暫しを想ふ
かゝる中にも 情報入りて
次の出動 下令されたり⁴³

彼が必死の 遁走に
猶追ひ行かんと 逸れども
一旦遅れし 我が出足
遂に距離をば 縮め得ず
止むなく基地に向ひけり

⁴² *5: 火を吹きしの見ず

⁴³ 注: 参考資料(p. 48)「幻」292頁:

‘3月11日午前11時ごろ、B24 11機、B25 15機、A20 52機、P47 40機、その他合計150機の大編隊が、3層に分かれてウエワク上空に侵入した。’

～～＜第二波来る＞～～



数^{かず}待^{まち}む 敵^かの大^{だい}群^{ぐん}
猫^{ねこ}額^{がく}の 我^われが基^き地^ちへと
波^{なみ}なせる 潮^{うしほ}の進^{しん}攻^{こう}
舞^{まい}ひ上^{あが}り 集^{あつ}りみれば
ブーツ⁴⁴なる 基^き地^ちの友^{とも}機^きは
後^{あと}方^{ほう}の ホランジ^アへと
回^{わい}避^ひして 姿^{すがた}を見^みせず
空^{おおい}蔽^{おほ}ひ 襲^{おそ}ひ来^きれる
敵^か群^{ぐん}を 邀^{まか}へ撃^げたん
翼^{つば}をば 連^{つら}ぬる我^{われ}等^ら
数^{かず}ふれば 左^{ひだり}に十^{じゅう}一^{いち}機^き⁴⁵
点^{てん}々^んと 浮^{うか}べる雲^{くも}を
越^こえ行^ゆきつ 高^{たか}度^どをとりぬ

見^みよ彼^か方^{なた} 眼^{がん}下^か遙^{はる}かに
大^{だい}型^が機^き Bノ二^に十^{じゅう}四^し
波^{なみ}なせる ジャン^グル越^こえて
数^{かず}知^しれず 進^{しん}み来^きれる
言^いひ知^しれぬ 数^{かず}の圧^{あつ}迫^{ぱく}
何^{なに}糞^{くそ}と 打^うち拂^{はら}ひつゝ
敢^{かん}然^{ぜん}と 機^き首^{くび}をば向^むけぬ
敵^か群^{ぐん}の 中^{うち}なる一^{いち}機^き
何^{なに}故^げなるか 旋^{せん}回^{かい}しつゝ
洋^{やう}上^{じやう}に 離^りれ来^きれり
之^{これ}之^まに 我^{われ}が好^{こう}餌^じと
攻^{こう}撃^{げき}は 下^か令^{れい}されたり
両^{りやう}側^{さつ}を 巧^{たくみ}に抑^{おさ}え
高^{たか}度^ど差^さは 一^{いち}千^{せん}五^ご百^{ひゃく}
前^{ぜん}方^{ほう}に 進^{しん}み出^いでつゝ

流^{りゅう}星^{せい}の 垂^{すい}直^{ちく}降^{かう}下^か
瞬^{たち}間^まに 彼^かが正^{せい}面^{めん}へ
猛^{まう}然^{ぜん}と 機^き首^{くび}をば向^むけぬ
對^{たい}進^{しん}の 近^{きん}迫^{ぱく}射^{しゃ}撃^{げき}
寸^{すん}秒^{びやう}の 暇^{いとま}もあらで
衝^{しょう}突^{とく}を 僅^{わず}かに避^さけて
すれすれに⁴⁶ 彼^かと飛^かび交^{かう}ふ
命^{めい}中^{ちゆう}は 認^{にん}めたれども
二^に十^{じゅう}耗^{こう} 載^{のり}まざる今^け日^{にち}は
一^{いち}撃^{げき}に 効^{きう}果^{くわ}少^{せう}なく
振^ふりかへり 後^{うし}ろを見^みれば
友^{ゆう}軍^{ぐん}機^き 相^あひつぎ襲^{おそ}ひ
彼^{かれ}既^{すで}に 爆^{ばく}弾^{だん}捨^すてて
一^{いっ}散^{さん}に 遁^{とん}走^{そう}せんとす

断^たえまなき 我^わが攻^{こう}撃^{げき}に
敵^かいたく 創^さつきつゝも
猶^な必^{ひつ}死^し 逃^{のが}れんするを
我^{われ}今^けや とどめ刺^ささんと
前^{ぜん}方^{ほう}を 扼^{やく}しつ右^{みぎ}へ
突^{とつ}進^{しん}の 機^き首^{くび}向^むけんとなす
不^ふ凶^と見^みれば 右^{みぎ}前^{ぜん}上^{じやう}方^{ほう}
新^{あらた}なる 敵^かの一^{いち}群^{ぐん}
此^こ方^ち指^さし 進^{しん}み来^きりぬ
傷^{きず}つきし 先^{さき}の敵^か機^きの
墜^た落^{らく}は 最^も早^{はや}必^{ひつ}せり⁴⁷
いざ次^{つぎ}の 敵^かを撃^げたんとなす
新^{あらた}なる 占^{せん}位^いなすべく
翼^{つば}をば 左^{ひだり}へ廻^{めぐ}らす
時^{とき}彼^かと 距^{きょ}離^り千^{せん}五^ご百^{ひゃく}

44 注： ウエワクの西
45 *6： 指揮官 倉矢大尉(航士 53 期)
46 *7： 過速の為 敵の翼上三米付近をすれ違ふ
47 *8： 墜落す



「前方を扼しつ右へ 突進の機首向けんとす」

~~<被弾>~~



エンジン激しく 響^{ひび}ける中に
右後方に 一瞬の軽き衝撃 感じたり⁴⁸
あな被弾ぞと 下向きし
顔に吹きつく 黒煙り
無念や僅^{わず}か 一発の
弾^{たま}に愛機は 火を吹きぬ

「しまった」「基地上空」「落下傘」
突嗟^{とつさ}に脳裏^{ひら}に閃めきて
左手にバンド 脱^{だつ}しつゝ
背面^{はいめん}にする 間^まもあらず
吹きつく煙の 激^{はげ}しさに
グッと体を⁴⁹ のり出しぬ

⁴⁸ *9: 同時に右下腿に痛み感ず。盲管破片創 火傷は顔面、四肢

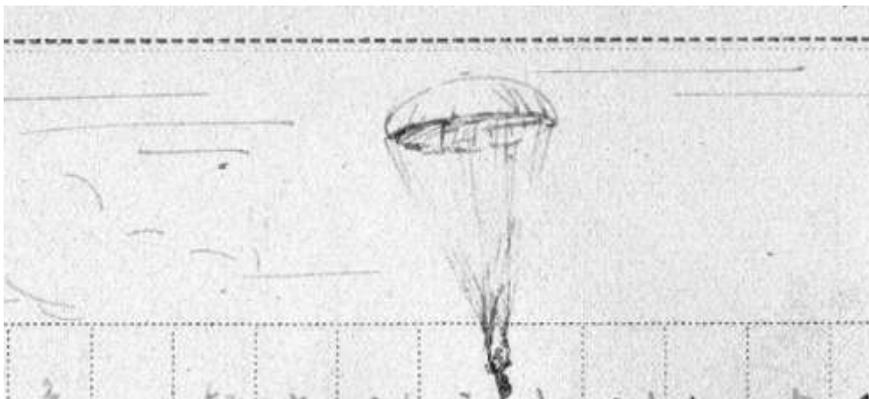
注: 右下腿機関砲弾破片創 兼 第2度火傷(兵籍簿より)

⁴⁹ *10: 高度二千四百

渦巻く煙に 眼前は
黒く蔽はれ 膚 焼く
激しき臭い 鼻をつき
猶エンジンは 雄叫びで
機速愈々 増大し
風圧激しく 乗り出せし
体は風に 押へられ
機体につきて 離れ得ず
炎は猶も 膚を焼き
息なし得ざる 風圧よ
眼鏡既に 飛び去りて
煙は今や 臉 焼く

足は漸く 風防に
かゝりて必死の 一蹴りに
体にかゝりし 風圧は
一時に消えて 柔かく
大気我をば 包みけり

今迄の 激しき苦しさ
消え去りて 安けき息吹に
呆然と 落つるを忘れ
大空に 身をば任しぬ
自動索 今伸びきりて
一瞬の 激しき衝撃
落下傘 中空高く
我吊りて 大きく開きぬ
開傘の その衝撃に
両足の 靴は脱げ去り
眼前の 海に消え行く
顔上げて 愛機探せど
南海の 波に消え去り
徒らに 我を撃ちにし
敵群の 影のみしるし⁵⁰
耳聾す 爆音消えて
遙かなる 音のみ響く
臉腫れ 眼 疲れて
俯し見れば 藍なす大海



人は言ふ 鱻や多しと⁵¹
諸手あげ 手首を見れば
両膚は 焼けて眞白く
神経は 既に麻痺しつ
痛みをば 殆ど知らず
足見れば 炎の為に
ズタズタに 袴 裂けにき

⁵⁰ 注：著し。はっきりしている、際立っている

⁵¹ *11: 海水浴すら禁じあり

爆煙は 基地を蔽ひて
四發の 敵大型機
数知れず 次々襲ふ
炸裂の 轟音遠く
大氣をば 揺り響きぬ

此の海や 人入りなば
必ずや 鱻の餌食ぞ
あゝ我身 此処に果つるか
我が部隊 操縦将校
戦死する 十三人目と
数へつゝ 空を揚げば
三式戦⁵² 一機舞ひより
彼我何れと 確め来りぬ
日章旗 出して打ち振り
手をあげて 無事を告ぐれど
我を待つ 下は死の海
翼猶ほ 近くに舞へど
救はるる 術もあるなし
彼我に 力つ肯と
近寄りて 翼振りつゝ
彼方へと 飛び去り行きぬ

渺茫の 太平洋や
陽光に 映ゆる大空
敵群も 今は帰りて
音もなき この中空に
我独り 光に包まれ
静けくも 舞ひ降り行く
死に臨み 家を憶はゞ
魂は 故郷に還らむ
我敢て 家を想はず
只管に 敵を撃たんと
魂を 此の地に留め
永久に 国を護らむ
手を合はせ 皇居を拝し
神宮⁵³を 俯し拝みつゝ
心中に 固くぞ誓ふ
さはあれど 無念なる哉
若し我に 神助ありせば
此の仇を 討たしめられよ
斯く思ひ 海面をみれば
何時しかに 高度は下り
吸はるが如 海に近づく

⁵² *12: 室津准尉

注: 室津准尉 - 室津朝男 (下士官操縦学生 73 期?) 19. 6. 1 ウエワク没

⁵³ 注: 伊勢神宮

脱出の 極度の疲労
 此の傷や 遠き岸辺に
 如何にして 助かるを得ん
 我今や 死せんとするか
 痛む眼を 打ち開きつゝ
 寂漠の 四周を見れば
 幾人の 生命吸ひにし
 南海の 強き陽射は
 凝然と 我をば包む

噫、我は 今死せんとす
 迫りくる 寂しき思ひに
 耐へきれず 大声あげて
 大空に 叫びて見れど
 空しくも 無窮の空に
 其の声は 消え去り行きぬ

秒一秒 海は近づき
 岸遙か 彼方に離る
 今迄は 浮ぶと見えし
 落下傘 見る見る中に
 海面へと 吸ひ込まれ行く
 息を呑み 足を縮めし
 我が体 水音高く
 南海に 飛沫上げたり

飛行第七十八戦隊第二中隊 航士五十五期生 陸軍中尉 平塚 勝	
一、受傷年月日	昭和十九年三月十一日
一、受傷場所	エーギヤ島ウエワノ松ノ岬東方約三料上空
一、傷名	右下腿盲骨機関砲弾破片創兼第二度火傷膈面四處
一、受傷状況	昭和十九年三月十一日 遼撃出動中敵大型機大編隊 ヲ發見戰隊同時之ニ攻撃ヲ指向シ遇テ一機ヲ 攻撃中他ノ敵機側方銃ノ射撃ニ依リ被彈發火受傷 シウエワノ松ノ岬東方約三料海上ニ落下傘降下ス
右現認ス	昭和十九年三月十一日 飛行第七十八戦隊第二中隊 陸軍中尉

現認證明書



～～<死闘>～～

顔を打つ 波と闘い
装帯に からみつきたる
日章旗⁵⁴ その麻繩を
渾身の 力にちぎり
落下傘 漸く離脱す

襲ひ来る 激しき疲労に
身を委ぬ 救命胴衣
おもむろに 水を掻きつゝ
見渡せば⁵⁵ 岸や遙けし
ジャングルは 波の彼方に
梢のみ 漸く見えぬ
水に濡れ 息吹き妨たぐ
覆面と 飛行帽とを
とり捨てて 大きく息つき
日章旗 左手に巻きて
岸指しつ 泳ぎ出しぬ

ひょうびょう この大海や
一物の 漂ふもなく
何事も 知らぬ如くに
悠々と 静まりかへる
されど此処 饑すむ海ぞ
纏ひつく 紐の重さに
拳銃も とりて打ち捨て
寸鉄も 帯びざる此の身
徒らに 彼が餌食か
身はいたく 疲れ果つれど
漂ひて 饑待つよりか
生還の 纒かの望み
すこしでも 岸边近くと
意を振り 猶水掻けり

海面をば 傳ふ爆音
第三波 敵の大群
超低空 ジャングルすりて
今襲ふ 基地ウエワーク
顔あげて 彼方を見れば
爆煙は 天に柱し
次々と 雲霞の如く
翔り行く Bノ二十五
夥し 数へ切れねど
明らかに 百機を越えぬ

⁵⁴ *13: 救命胴衣の「ポケット」に装備しあり。麻繩にて繋いでありて先にとり出せし為 からみつけり

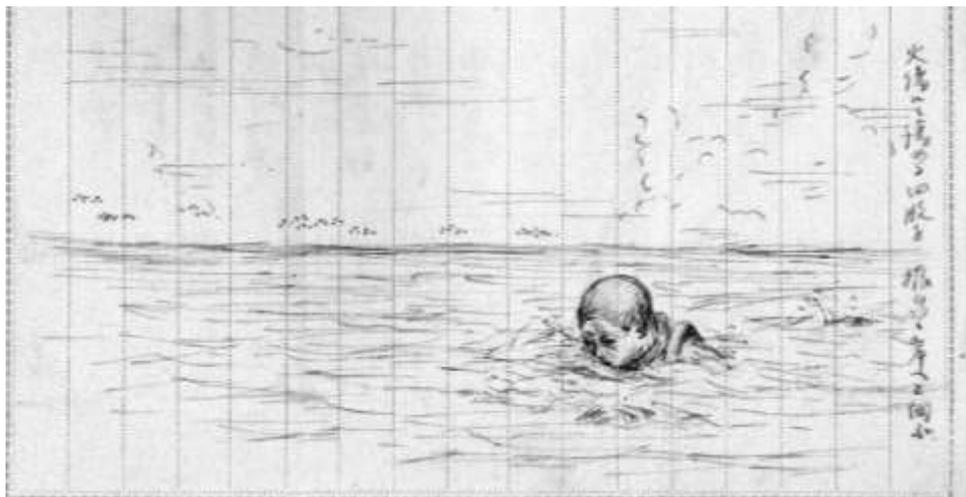
⁵⁵ *14: 岸より約三軒余

にちりん なかそら
日輪は 中空高く
さんさん や
燦々と 頭上を灼きて
た がた かわ
耐え難き 湯き覚えつ
岸見れど なお ほろ
破れたる 袴をば脱ぎ捨て
海中に 頭を濡らし
なにくそ くい
何糞と 歯を食ひしぼり
にくに
憎々くきは Bノ二十四
この 仇 この 恨をば
はらさでは 如何で死なむと
やけど
火傷にて 傷める四肢を
ふるい むかう
振りつゝ 岸へと向ふ
かゝる中 銃爆撃の
なほ ひび
音猶も 響き来りぬ

か まで
斯く迄も 苦しみつゝも
も フカ
若し鱻の 近寄るあらば
此の命 此処に果つるか
今は唯 しんじよ ねがひ
神助を願ひ
運命を 天に任せて
水かけど 疲れ激しく
ち ち
遅々として 身は得進まず

きずあと
傷痕は 感覚もなく
い [ひざし]
射りつくる 強き陽射に
胸中も いたく疲れて
かしら あ
頭をば 上ぐるも苦し
あまりもの 激しき湯きに
おもわ うしお
思はずも 潮を飲めば
あなからし なお かわ
猶も湯けり
ときお [ゆんで]
時折りに 左手に巻きし
日章旗 うち眺めつゝ
今ははや おもわ
何も思はず
無意識に ただかなた
唯彼方へと

—泳げども 猶泳げども
泳げども 岸や遙けし
爆音は 既に消え去り
水掻ける 音のみ響く
まぶた まなこ
瞼腫れ 眼痛みて
目を閉ぢて 手足動かし
この 仇 この 仇をと
くりかえ おもいつぶや
繰返し 思ひ呟く——



「火傷にて傷める四肢を 振りつゝ岸へと向かふ」

痛みたる 眼 開けば
あゝ彼方 波間遥けく
岸边をば 洗ふ白浪
折々に 見え来りけり
甦へる 生への希望
或は又 助かるを得ん
ジャングルの上のみ見えし
最初なる 降下地点や
漸くに 岸边は見えぬ
今暫し 神よ護れと
眼閉ち 仰向き浮び
暫しとて 軀 憩めぬ
傷つきし 吾を浮べし
大海は 静かに揺れて
南海の 燃ゆる陽光
大空に 燦めき渡る

岸近き 珊瑚礁へと
砕け行く 白波の音
今耳に 響き来れり
降下して⁵⁶ 既に幾刻
四肢いたく 疲れ果つれど
僅かづつ 浪にまかせて
岸边へと 泳ぎて行けば
ゆるやかに 我を揺りにし
小波は 大きく揺れて
一線に 打ち並びつゝ
岸指して 進み行きけり

あゝ今や 岸は眼近く
あきらかに 渚ぞ見えぬ
水搔くを 暫し休めて
大声に 岸边を呼びぬ
されど猶 遠き過ぐにや
浮き沈む 波にゆられて
人出づる 姿も見えず
頭をば 潮に冷し
意を振り 岸へ岸へと
水搔けり 又水搔けり

再度なる 我が呼ぶ声に
人々は⁵⁷ 岸边に見えぬ
あな⁵⁸嬉し 疲れ忘れて
大声に 更に呼びけり
「今助く 暫く待て」と
彼等今 波にぞ入れり

助かりぬ あゝ生きてあり
こみ上ぐる 無限の思ひ
覺えずに 口より出づれば
傍へにて 「気を落すな」と
仰向きて 唯浮びたる
我が体 側より押しつ
泳ぎ行く 戦友ぞ嬉しき

⁵⁶ *15: 降下時刻 十一時頃 岸に到達十四時頃

⁵⁷ *16: 松の岬の自動車中隊なり

注: 松の岬 - ウエワク東地区モエム岬 (Cape Moem) p. 55 ウエワク 参照

⁵⁸ 注: ああ

助かりぬ あな助かりぬ
繰返し 眩きかへし
応急の 手当を受けて
宿舎にて 暫しを憩ひ
入院の⁵⁹ 手続なすと
彼言ふを 断りなしつ
一先づに 部隊に帰り
報告を なすべきなりと
傷つきつ 疲れ襲ひて

動かざる 我が身体をば
漸くに 自動車に委ね
悪路をば 打ち揺られつゝ
夕闇の 迫れるピストに
漸くに 辿りつきけり
其処よりは 担架に揺られ
ジャングルの 中を分け入り
宿舎へと運ばれたりしぞ

～～＜再び夜更けて＞～～



あゝ我は 生きてありけり
繰返し 心に眩き
仰向きつ 脚のばさんと
なしたれば 傷は疼きて
疲れたる 頭は冴えぬ
傷痕は 夜半に至りて
漸くに 感覚は覚め
激しくも 疼き始めり
友呼びし⁶⁰ 軍医来りて⁶¹
苦しめる 吾が腕に
鎮静剤⁶² 注射ぞなしぬ
忽ちに 襲ふ睡魔に
何事も 打忘れつゝ
身動きも なさでそのまま
灯の ゆらめく中に
深々と 睡りに入れり

⁵⁹ *17: へいたん 兵站病院 此の病院は翌々日の空襲により粉碎されぬ

⁶⁰ *18: 木村中尉(航士 55 期)

注: 木村中尉 - 木村正 19. 9. 25 ホランジア 西北方 140km 没

⁶¹ *19: 尾野軍医中尉

注: 尾野軍医中尉 - 尾野敏雄?

⁶² *20: パピナール、モルヒネなり

ウエワクを去る 昭和 19(1944)年 5 月

南海の 夜空は澄みて
月白く 天に懸りぬ
果しなく 續く大海
黒々と 横たふ陸地
寂として 聲なき空を
満身に 月光浴びて
唯一機 灯 消しつ
西を指す 重爆撃機

此の岬 彼の湾や
思ひ出づ 去年の七月⁶³
鵬翼を 運ねて来り
死闘せし 吾等が基地ぞ
数多なる 戦友失ひし
効ひもなく 吾今こゝに
他部隊の⁶⁴ 機に身を委ね
限りなき 思ひ残して
今宵去る 基地ウエワーク

月影に 遠ざかり行く
基地眺め 眼 閉づれば
浮び来る 過ぎし月日の
血ににじむ 戦ひの跡

反撃の 態勢なれる
敵今や 数をば待み
強引に 進攻し来り
我が主力 転進なせし
後方の ホランジアへと
上陸し⁶⁵今や旬日⁶⁶
空戦に 傷つき残りて
空しくも 地上に果つかと
思ひ居し 我にあらずや

晝過ぎて 告ぐる電話に
驚きて 身支度をなし
ジャングルの 中を出で立ち
夕闇の 迫る頃ほひ
着きにけり 飛行場へと

限りなき 鉄と火薬に
椰子林は⁶⁷ 姿を失なひ
滑走路 穿てる孔の
其の数は 八十⁶⁸をば超えぬ
今宵来る 機を迎へんと
漸くに⁶⁹ 僅かの巾の
滑走路 補修をなせし
其の後に 今日空襲
又二つ あきたる穴は
急ぎつゝ 直ほしむたりき

⁶³ *1: 七月十五日ラバウルより転進

⁶⁴ *2: 飛行第六十一戦隊 百式重 機長 高橋大尉(航士 54 期)
注: キ 49 一〇〇式重爆撃機 呑龍(どんりゅう)

⁶⁵ *3: 三月三十日

⁶⁶ 注: 10 日くらいの日数

⁶⁷ *4: 海の見えぬ飛行場より海が見える程になりぬ

注: 「防空壕にて」、「三月十一日」の添付写真を参照。

⁶⁸ *5: 全然飛行場と思へず

⁶⁹ *6: 夜間作業のみ三晩徹夜にて実施す。巾五十米足らず

此の基地や 愛機^{あやつ} 操り
幾度か^{いくたび} 舞上^{まいあが}りける
此の基地や 戦友^{いくたり}の幾人
舞^{まい}ひ立ちて 帰^{かえ}り来^こらず
今^{いま}既に 愛機^{あやつ}失^{うし}ひ
残骸^{ざんがい}の 影^{かげ}のみ著^{しる}し
猶^{なほ}僅^{わず}か 痛^{いた}める足を
引^ひきづりつ ピスト^{ピスト}に行^いけば
夕闇^{ゆうやみ}は 四^よ辺^{へん}閉^とざして
灯^{ともしび}は 赤^{あか}くゆらめく

時移^{とき}り 夜^よは更^あげゆきて
あゝ今^{いま}や 機影^{きかげ}は見えぬ
月正^{つき}に 東天^{とうてん}に冴^さえ
案^{あん}じたる スコ^{スコ}ールもなく
月明^{げつめい}に 弾痕^{だんこん}縫^ぬひて
重爆機^{じゅうばくき} 今^{いま}ぞ降^おり来^こぬ
翼^{つばさ}なる 此^この日の丸^{ひのまる}や
今^{いま}迄^{まで}は 空^{くう}ゆく翼^{よく}に
見^みしものは たゞ星^{せい}印^{いん}
我^{われ}れ二^に度^どと 旭^{あす}日^{じつ}機^きをば
見^みるを得^えじ 斯^かく思^{おも}ひしに
あゝ今^{いま}ぞ 器^き材^{ざい}卸^{おろ}せし

此^この翼^{つばさ} 吾^{われ}等^ら八^{はち}人^{にん}
再^{また}びも 働^{はたら}き呉^くれと
前^{まへ}線^{せん}の 期^き待^{たい}をのせて
轟^{ごう}然^{ぜん}と⁷⁰ 迂^うり出^いしぬ

弾痕^{だんこん}に 形^{かた}変^へるも
見^み慣^なれにし 噫^{あゝ}、此^この基地^{きち}や
待^{まち}て暫^{しば}し 我^{われ}等^ら必^{かな}ず
翼^{よく}連^{つら}ね 再^{また}び来^きらん
尾^び部^ぶ遥^{はる}か 離^{はな}れ去^さり行^いく
滑^{くわ}走路^{さろ} うち見^お下^{くだ}ろせば
萬^{ばん}感^{かん}は 胸^{むね}に迫^{せま}りて
覺^{おぼ}えずに 血^ち潮^{しほ}うづきぬ

いざさらば 基地^{きち}ウエワ^{ウエワ}ク
月^い愈^いよ 天^かに輝^{かが}き
大^{わだつ}海^みは 金^{きん}波^ばを浮^{うか}べ
美^{うる}はしき 南^{なん}海^{かい}の夜^よに
新^{あらた}なる 希^き望^{ぼう}と共^{とも}に
限^{かぎ}りなき 恨^{うら}み抱^{いだ}きつ
凄^{せい}壮^{そう}の 戦^{せん}場^ば越^こえて
翔^{かけ}り行^いく 重^{じゅう}爆^{ばく}撃^{げき}機^き
我^{われ}今^{いま}や⁷¹ ウエワ^{ウエワ}クを去^さる
いざさらば 基地^{きち}ウエワ^{ウエワ}ク

*昭和十九年五月十二日⁷²

注： 昭和 19(1944)年



キ 49 百式重 呑龍

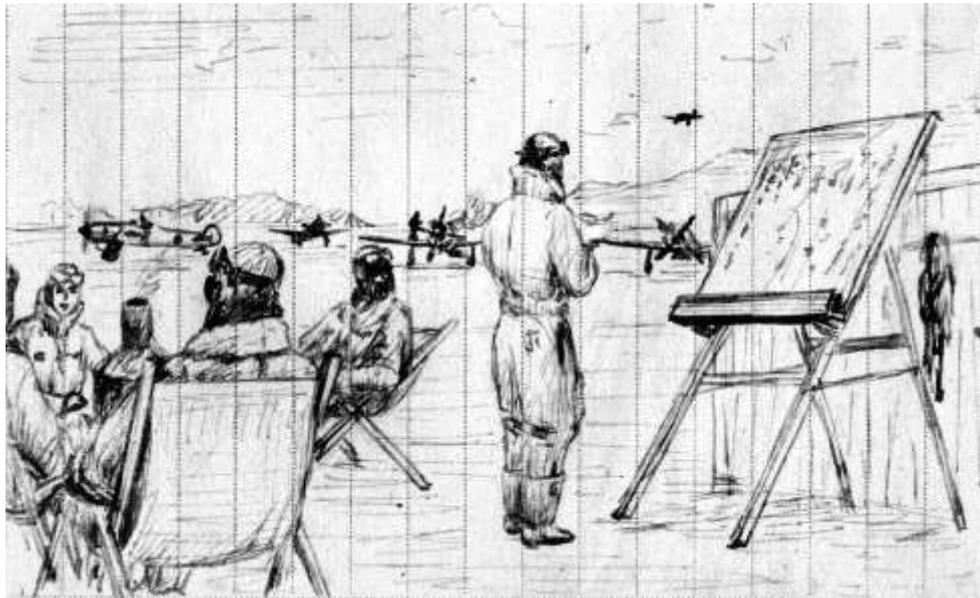
Wikimedia Commons より

⁷⁰ *7: 午前二時

⁷¹ *8: 五時頃ヌンホル島着。十時頃ハルマヘラ島ワシレ着。正午頃ミティ飛行場着

⁷² 注： 参考資料(p. 48)「幻」438頁に61戦隊による5月14日、15日の記述あるが5月12日の本件の記載なし

名古屋上空高度 1 万 昭和 20(1945)年 1 月 明野教導飛行師団⁷³



今日も⁷⁴赤 情報入りぬ
「敵編隊 サイパン島を
数梯団 今朝出撃す」
黒板に 白く書かれぬ

訓練の 翼^{つばさ}休めて
今日こそと 独り^{ひと}眩^{つぶや}き
おもむろに 眼^{まなこ}を^{てん}転ず
その^{かなた}彼方 並ぶ^{よんせん}四戦
その名をも 疾風^{はやて}といはめ
今日こそと 再び^{つぶや}眩^{つぶや}き
愛機をば じっと見つめぬ

訓練を ^{おえ}了へて打ち連れ
昼食に 行く道すがら
忠魂碑^{ちゅうこんひ}⁷⁵ 無言に立ちて
撃つべしと 我を励ます

機は^た足らず 故障は多く
幾度か ^{いくたび}機会はあるど
有効の 攻撃^む向けし
こともなく 今日^{むかえ}を迎へぬ
好調の 今日の愛機よ
しっかりと 心に祈り
食堂に ^{みな}皆と^{はい}入れり

高々度 一万^{メートル}米
邀撃^{ようげき}の 身体^{からだ}のつらさよ
十分の 食事を^と摂らば
減圧に⁷⁶ 腹^{はら}はふくれて
苦しさに ^{のぼ}よく上り得ず
そが^{ため}為に ^{つか}疲るゝ身に
一膳を 軽くよそひて
早々と 食事を^{すま}済し
ピスト⁷⁷にて 酸素^{すい}吸ひつゝ
来るべき 出動を待つ

⁷³ 注： 明野教導飛行師団（明 KFD）司令部附

⁷⁴ *1: 二十年一月十四日 注： 1945 年

⁷⁵ 注： p. 52 陸軍明野飛行学校（現陸上自衛隊明野駐屯地） 忠魂碑写真参照

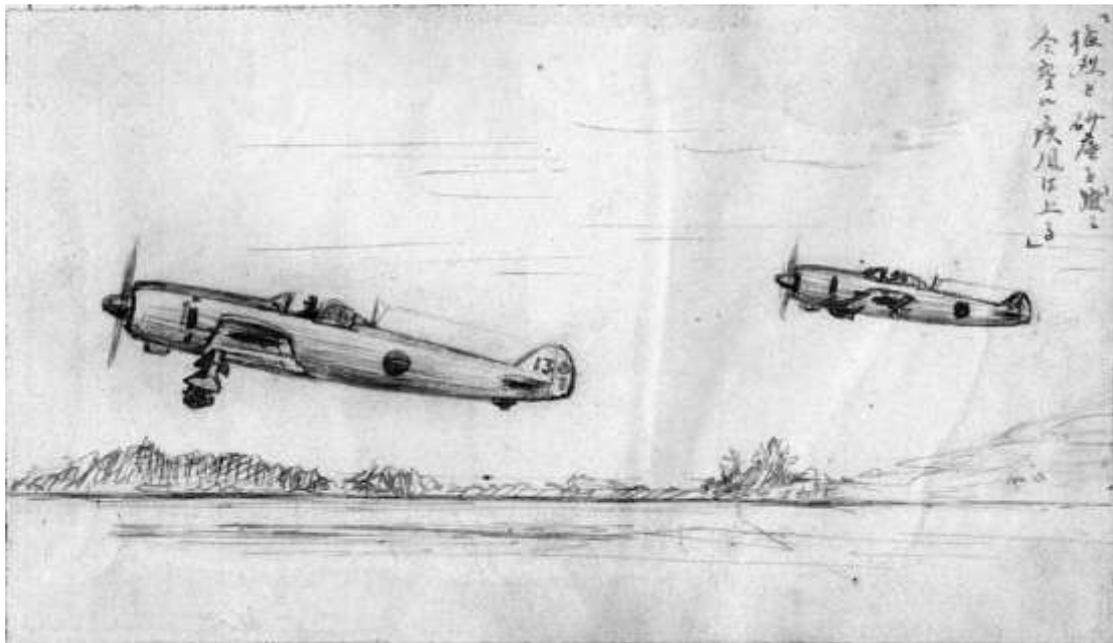
⁷⁶ *2: 普通量を攝らば6千米にて殆ど上り得ざる程となる

⁷⁷ 注： 操縦士待機場所

寒風は 膚をば刺し
雪雲は 空に飛び交ふ
火を囲み 生死忘れて
ひとときを 皆にてくつろぐ
其の間にも 醜翼幾多
刻々と 我に近づく

拡声器 やがて報じぬ
「^{〔なきり〕}波切基点⁷⁸ 百七十度
三〇〇軒 一目標あり」
そら来たと 顔を見合はせ
何かなと 微笑み合ひつ
飛行帽 かぶりなほせり

飛行場 今やどよめき
試運転 四周に響く
命受けて 砂塵残しつ
飛燕隊 早くも飛びたつ
其の中に 満を持しつゝ
待機する 我等が疾風
情報は 猶も續きぬ
「目標は 更に数団
大編隊 なるが如し」と



「猛烈と砂塵を蹴て 冬空に疾風は上る」

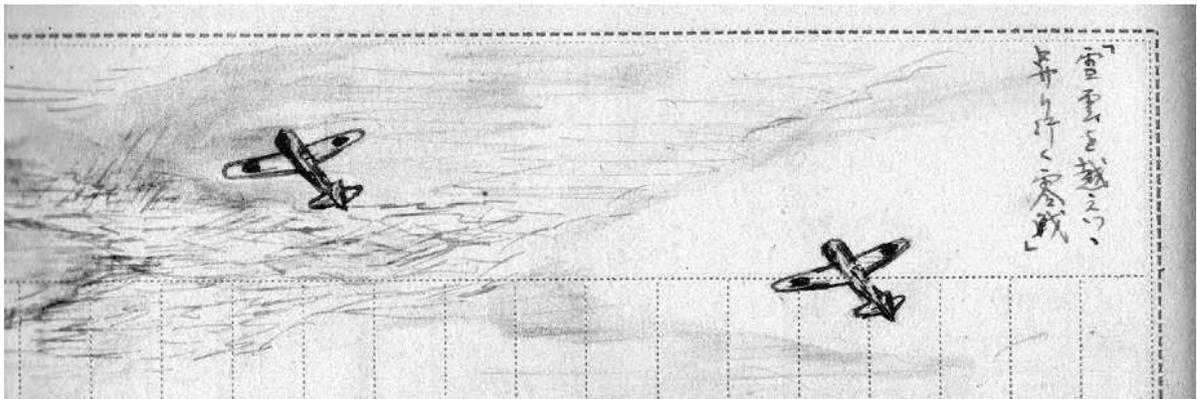
⁷⁸ *3: 志摩半島南岸 電波監視所
注: 三重県志摩市大王町波切

「戦甲隊⁷⁹ 直ちに出勤
熱田上空 高度一万」
いざやいざ 時ぞ至れり
計器をば 点検しつゝ
締めなほす 酸素のマスク
レバーをば グッと開けば
轟音は 大地を揺り
回転数 二千九百
猛然と 砂塵を蹴つて
冬空に 機首をば向けぬ

高度計 グングン上りて
はや示す 高さ三千
機上より 伊勢の宮居を
片手あげ 俯し拝みつゝ
今日こそと 又もつぶやき
幾重もの 雪雲越えて
見渡せば 瞳にうつる
美しの 緑島山

それを賞づる⁸⁰ 暇もあらず
エンジンを 二連に切換え
一心に 機を操りつ
敵影を 求めて上る

昇降計 十米余
高度計 早くも七千
零戦や 或は飛燕
あちこちと 舞ひ上りゆく
不図見れば 頭上千余を
一群の 敵大編隊
名古屋さし 過ぎり行きけり
邀撃の 第一陣よ
此の敵を 撃ちてくれかし
願ひつゝ 左を見れば
一列に 並ぶ黒点
その高さ 約八千余
いざ之を 血祭りにとて
猶も又 上昇續く



「雪雲を越えつゝ昇り行く零戦」

⁷⁹ *4: 戦隊長 要員学生一甲種学生にて編成せし邀撃作戦部隊

⁸⁰ 注: いとおしむ

高度計 今八千を
示すとき 彼の敵編隊
後部より 白煙ふくと
思ふ間に 忽ち高度
九千に すすみ上りて
その速度 急に増加す
あなやこれ ロケットなるか⁸¹
白煙り 雲となりつゝ
中空に 白く漂ひ
我未だ 高度は足らず
遂に又 之をも逸す

友軍機 之を襲ふを
眺めつゝ 試射をなさんと
電鍵を 押せば無念や
何事ぞ 右の翼砲⁸²
故障にや 焔を吹かず
左翼のみの発射に
機はいたく 振動したり

されど今 降りて修理さん
暇なし 意をば決して



猶上る 冬の寒空
強烈の⁸³ 偏西風に
西向くも 機は進み得ず
そのままに 高度をば得て
巻層雲 翼下に眺め
今示す 九千六百
希薄なる 大氣の為と
不足する 酸素の為に
漸くに 浮ぶ島船
操舵すら 思ふに任せず
近づける 敵の編隊
又しても 無念逸しぬ

あな強き 此の西風や
一瞬の 操舵あやまり
機はいつか 遙か北東
流されて 帰りもやらず
かゝる中 次の梯団
焦らんも 機は得進まず
常に似ぬ 敵の機動に
遂に又 逸し去りたり

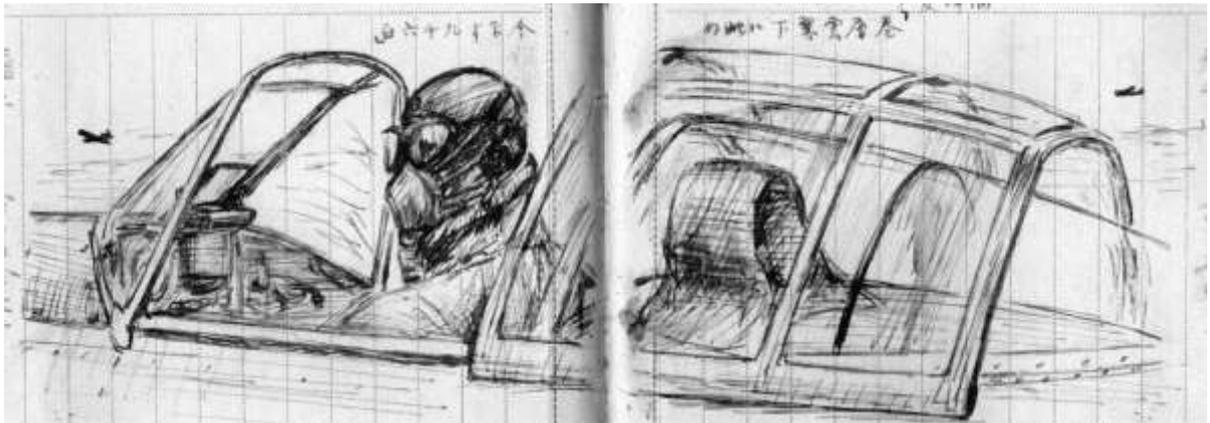
四戦 - 四式戦闘機、キ 84、疾風(はやて)

Wikipedia ファイル:Nakajima Ki84 Hayate
N3385G ONT 18.10.70 edited-3.jpg より

⁸¹ 注: B29 は過給器として排気タービンを装備

⁸² *5: 翼は 20 耗を装備しあり。片翼故障のときは反動にて反対側に激しく振られて命中至難

⁸³ *6: H9,000 にて 80-90 米/秒 H10,000 にて 90-100 〃 (冬季のみ)



「巻層雲翼下に眺め 今示す九千六百」

如何にせん かくも氣負ひて
のぼりにし 今日此の日よ
此のままに 過ぎば遂に
臍嚙むも 追ひつき得なん
されど今 時は過ぎ行き
発生剤⁸⁴ 故障せるにや
息苦し 酸素は足らず
四周みな 友機は下りて
高空に 吾のみ残る
燃料も 余すは僅かと
油量計 点検すれば
見よ彼方 航跡雲引き
一群の 敵は来れり

此の敵を 逸さば再び
撃つときは 廻り来らじ
友軍機 無き大空に
我一人 此にぞ向ふ

時計見つ 時間を記し
機数をば 確かむ十機
急旋回 接敵せんと
操舵せば 眼はくらむ
あな酸素⁸⁵ 既に断れにし
南無八幡⁸⁶ 歯を喰ひしばり
息をつめ 必死の占位
高度計 九千四百
旋回を 左に切換へ
瞬間に 態勢を見つ
霰なす 敵の火網の
只中に 飛び込みにけり

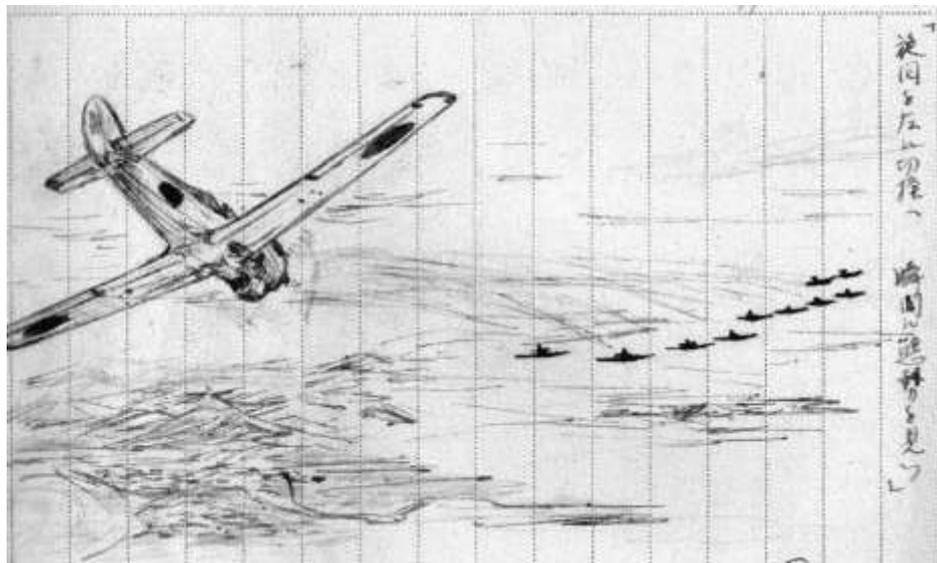
⁸⁴ *7: 酸素発生剤

⁸⁵ *8: 着陸後点検せるに故障の為に離陸後一時間余にて当然酸素なくなりし筈なり。
然し高度七千以上にて酸素断るれば直ちに失神する筈なれど、
最後迄飛行し得しは全く不思議なり

⁸⁶ 注: 絶体絶命

此の突進 多年の練磨ぞ
青空を 真紅に染むる
彼が火網 巧に避けつ
近迫す 六百 五百
くその間の 僅に数秒⁸⁷
耐え難き 長き思よ>
今や我が 照準眼鏡
捉へけり Bノ二十九
右翼の 故障の砲の

修正に 稍前方を
照準し 電鍵押せば
曳火弾 烟り残して
彼が機首に 吸ひ込まれ行く
時今と 雄叫ぶ⁸⁸機銃
至近距離 二百 一百
見よ今や 我が二十耗
眼前の 敵胴中に
炸裂の 火花散らせり



「旋回を左に切り換へ 瞬間に態勢を見つ」

反転し 後ろを見れば
雨と降る 敵の尾部砲
如露にて 水撒くが如
我が後を 追ひて乗りぬ
急激の 機動に之を
回避して 効果を見れば
敵は今 白煙吹きて
編隊を 次第に離れぬ
息苦し 呼吸耐へて
浜名湖の 彼方に逃る

敵機をば 猶見守れば
白煙は 黒く変りて
八千に 高度は下り
約二耗 主力に遅る
猶追はん 心逸やれど
燃料も 酸素も盡きて
夕暮に けぶる伊勢海
緩降下 急ぎ過りて
神風の 伊勢の明野の
我が基地に 翼ををさむ

⁸⁷ *9: 約三秒(相対速度毎秒二〇〇米以上)

⁸⁸ *10: 発射弾数 20耗 25x1 12.7耗 15x2

今日こそと 期せし今日なる
遺憾にも 数多の敵機
逃したり 翼砲更に
故障にて 効果上らず
又次と 心に期しつ
夕闇に けぶるさ中に
戦ひを 振りかへり見ぬ
無念なり 斯も多数の
敵群を 眺めたりしも
一機のみ 漸く屠りて
他を逸す 今日戦ひ

酸素きれ 頭のみかば
体中 その節々に
堪え切れぬ 痛み覚えつ
星影の 燦く頃に
漸くに 家路につけり

昭和二十年一月十四日⁸⁹



B-29

Wikipedia より

⁸⁹ 注: B29 爆撃機が名古屋を爆撃。伊勢神宮が被弾。 1945 年 1 月 14 日

<http://photozou.jp/photo/show/2506004/217250230>

1 月 14 日 名古屋の三菱重工爆撃のために B-29 75 機がマリアナより出撃。5 機を失う。

<https://www.pacificwrecks.com/airfields/japan/komaki/missions-nagoya.html>

特攻隊を送る

昭和 20(1945)年 5 月

飛行第 17 戦隊⁹⁰

藍を流せる^{わだつみ}大海を 眺めつ^{なが}翔る^{かけ}我が^{つばき}翼
太平洋上^{しよか} 初夏の風 君が^{かど}首途^で⁹¹を送り吹く
噫^{あゝ} 神国^{しんこく}に生^{せい}享^{じやう}けて 未^み曾^{ぞう}有^うの危^き機^きに今^あぞ遭^あふ
今^{われ}吾^{われ}立^たたで何^い時^つの日^ひか 我^{われ}が命^{いのち}をば捧^たげなむ
波^{なみ}の彼^{かなた}方^{かた}ぞ青^{せい}山^{ざん}と 莞^{わん}爾^にと⁹²笑^{わら}ふ若^わ桜^{くら}
仮^{たと}令^い此^この身^みに罪^{ざい}劫^{ごう}の 盡^つきせぬ^せこと^{こと}のありと^{とも}も
今^{われ}我^{われ}が^わつ^くす誠^{まごころ}心^{こころ}に すべて^{きよ}の罪^{つみ}を浄^{きよ}めよと
胸^{きょう}中^{ちゆう}既^{すで}に生^{せい}死^じなく 今^{われ}ぞ基^い地^ちをば⁹³出^いで^た発^はちぬ

基^き地上^{ちゆう}空^{くう}を制^{せい}空^{くう}の⁹⁴ 高^{たか}度^どを^さ下^{くだ}げて^さ近^{ちか}寄^よれば
翼^{よく}に爆^{ばく}弾^{だん}抱^{いだ}きつゝ しつ^{しつ}か^かと組^{くみ}める編^{へん}隊^{たい}に
僅^{わず}か^かの揺^ゆぎ^ぎあ^あら^らば^ばこ^こそ 悠^{ゆう}々^{ゆう}高^{たか}度^どを^あ上^あげ^げ行^いき^きぬ
思^{おも}へば^え今^{いま}迄^{まで}共^{とも}々^々に 日^{にち}夜^や訓^{くん}練^{れん}重^{かさ}ね^き来^きし
我^{われ}が部^ぶ下^{くだ}達^{たつ}⁹⁵と永^{とこ}遠^{えん}の 翼^{つばき} 別^{わか}れ^れん^こ此^この^{この}日^ひな^なれ
尾^び部^ぶに^{いろ}彩^どる^わ我^{われ}が^{しる}隊^{たい}の 印^{いん} も^{しる}し^るく^め眼^めに^しみ^ぬ

世界^ひに比^ひなき皇^{こう}国^{こく}の その^[たぐ]比^ひひ^いなき航^{かう}空^{くう}に
榮^{はえ}ある^{ある}戦^{せん}闘^{とう}隊^{たい}員^{いん}の^{めい}名^なをば 漸^{よう}く^や得^{とく}る^を得^{とく}て
家^{いえ}路^じを^い出^でし^そ其^その^{しゅん}夢^むも 其^その^{しゅん}春^{しゅん} 秋^{しゅう}も^{じゅう}過^{くわ}ぎ^き去^きり^ぬ
さ^{しゅん}なり^{じゅう}春^{しゅん} 秋^{しゅう} 過^{くわ}ぎ^き去^きれ^り 戦^{せん}雲^{うん}本^{ほん}土^どを^お覆^おふ^とき
既^いに^き今^{いま}日^ひの^わ日^ひある^ゆを^く期^{きて}し 吾^{われ}等^らが^ゆ行^く手^て自^じ覚^{かく}し^つ
そ^いれ^く急^い降^{くわ}下^か衝^{しゆ}突^{とく}の 訓^{くん}練^{れん}幾^{いく}度^ど重^{かさ}ね^しか

あゝ^{ぼう}茫^{ぼう}々^{ぼう}の^{なみ}太^{かなた}平^{かなた}洋^{かなた} 浪^{なみ}の^{なみ}彼^{かなた}方^{かなた}の^{なみ}星^{なみ}条^{かなた}旗^{かなた}
今^{われ}我^{われ}が^{せま}本^{ほん}土^どに^う迫^おり^わ来^わて 既^いに^う沖^う繩^{じゆ}奪^わは^れぬ
その^{こう}紅^{こう}頬^{きョ}に^の豊^{ゆたか}かな^なる 希^の望^{ぞみ}は^の尽^まき^すぬ^ま丈^{ます}夫^らよ
輝^きく^さ空^{そら}の^さ防^ぼ人^{にん}の 名^なに^{いのち}生^{いのち}命^ちを^ちば^ち散^ちら^ちさん^とと
帰^{かえ}る^{かえ}燃^も料^{りょう}載^{ざい}む^もな^なく 飛^とび^と行^いく^よ翼^{よく}の^よ下^{した}に^よ見^みる
之^{これ}ぞ^{これ}見^{けん}敵^{てき}必^{ひつ}殺^{とく}の 意^い気^きの^{こも}籠^{かご}り^りし^り爆^{ばく}弾^{だん}ぞ



飛行第17戦隊の3式戦。尾翼マークの黒く見える部分が赤で中央の丸は白

出典：航空情報別冊 日本陸軍戦闘機隊

⁹⁰ 注： <戦隊長> 19.12～終戦 高田義郎大尉(航士 53 期)
<飛行隊長> 20.1～終戦 平塚勝大尉(航士 55 期)
⁹¹ 注： 門出
⁹² 注： にっこりと
⁹³ *1: 台湾八塊飛行場
⁹⁴ *2: 制空掩護 平塚大尉 西川曹長 岩本伍長
⁹⁵ *3: 普通の戦闘戦隊よりの特攻編成

あゝ人ぞ知る特攻の 其の攻撃の凄絶を
雲をば呼びて風を巻く 矢よりも速き高速に
今突入の一瞬時 眼 閉ぢなば有効の
命中決して期すを得じ 五体砕くる時迄も
眼 開きてありてこそ 至上の戦果期すべけれ

我が掩護の燃料も 残るは僅かとなりぬれば
洋上離る五十軒 今我が基地に還らんと
振り向き眺むその彼方 波に浮べる山影や
紫 けぶり雲ぞ湧く 島人は言ふ蓬莱⁹⁶と

レバー開きて翼 寄せ 今ぞ最後の袂別と
最後尾より一機宛 翼 を振りてうち見れば
あゝ見なれにし我が部下よ⁹⁷ 皆微笑みて翼 を振り
或 は拳 打ちふりて 心配なしと答へけり
明野時代の教へ子の 岡田、富永⁹⁸いざさらば
臆ては我も後追はん では頼むぞと近寄れば
機上に手上げて敬礼し いざお先と打ち笑みぬ

⁹⁶ 注：台湾の異称

⁹⁷ *4: 隊長 岡田少尉 隊員 富永少尉、佐田少尉、稲盛少尉、松村軍曹、大河内軍曹

注：<http://evnara.blog.fc2.com/blog-entry-33.html>

<https://blogs.yahoo.co.jp/yuuutunarutouha/36171259.html>

稲森静二少尉/岡田政雄少尉/佐田通安 少尉/富永幹夫少尉

6月5日花蓮港基地より出撃

注： 知覧特攻平和会館 受領資料によると

飛行第17戦隊第2次(3式戦12機12人)

5月3日、5月31日、6月5日に出撃。特攻戦死8名、戦死1名、その他3名。

⁹⁸ *5: 岡田、富永少尉は明野教官時代に一時教育せしことあり、特操一期

注： 特操 - 特別操縦見習士官(学驚)

操縦者不足に対応するために高校・大学の卒業生・在校生を短期間で操縦教育を施す制度。

第1期生は1943年10月入隊。第1期、2期生の多くを特攻隊員として採用

いざさらばぞと手を挙げて 翼大きくめぐらせば
忽ち離る我と彼 聽て霞に融け行けり
噫 此の波の彼方にて 聽て轟雷響くらむ
我等多年の辛苦をば 華と咲かせよ国の為
續く僚機を⁹⁹打ち見つゝ 基地¹⁰⁰指す機首を操りて
ひとり己れに呟きぬ 「残る桜も散る桜」

散る桜 残る桜も散る桜 一足先きにあの世にて
我等の行くを待ち居てよ 聽て手柄を語らはん
ちぎれて浮ぶ白雲を 越えつゝ後ろ見返れば
遙かに霞む海原に 悠々流る雲一重
あゝ あの雲の果て遠く 我が墓や並ぶらん

今機上より降り立ち見れば
夕闇迫りて爆音は絶え
雲東天の極みに去りて
紫 けむりて色や美はし
この美はしの空の御殿に
今宵帰らむ君等の御壺
落日染むる五彩の雲を
仰ぎつひとり又呟きぬ
「散る桜 残る桜も 散る桜」¹⁰¹



鶴田浩二 Victor SV-6623 より

昭和二十年五月三十一日

⁹⁹ *6: 西川曹長

¹⁰⁰ *7: 花蓮港

¹⁰¹ 注: 良寛禅師辞世の句

最後の飛行

昭和 20(1945)年 12 月

速度計 百五十軒

極く短い滑走で

武装を脱して身軽になった五式戦¹⁰²は

今やんはりと空に浮き上^{あが}つた

機首を^{たおま}忽ち上に向けて

二百四十^{キロ}軒離陸上昇

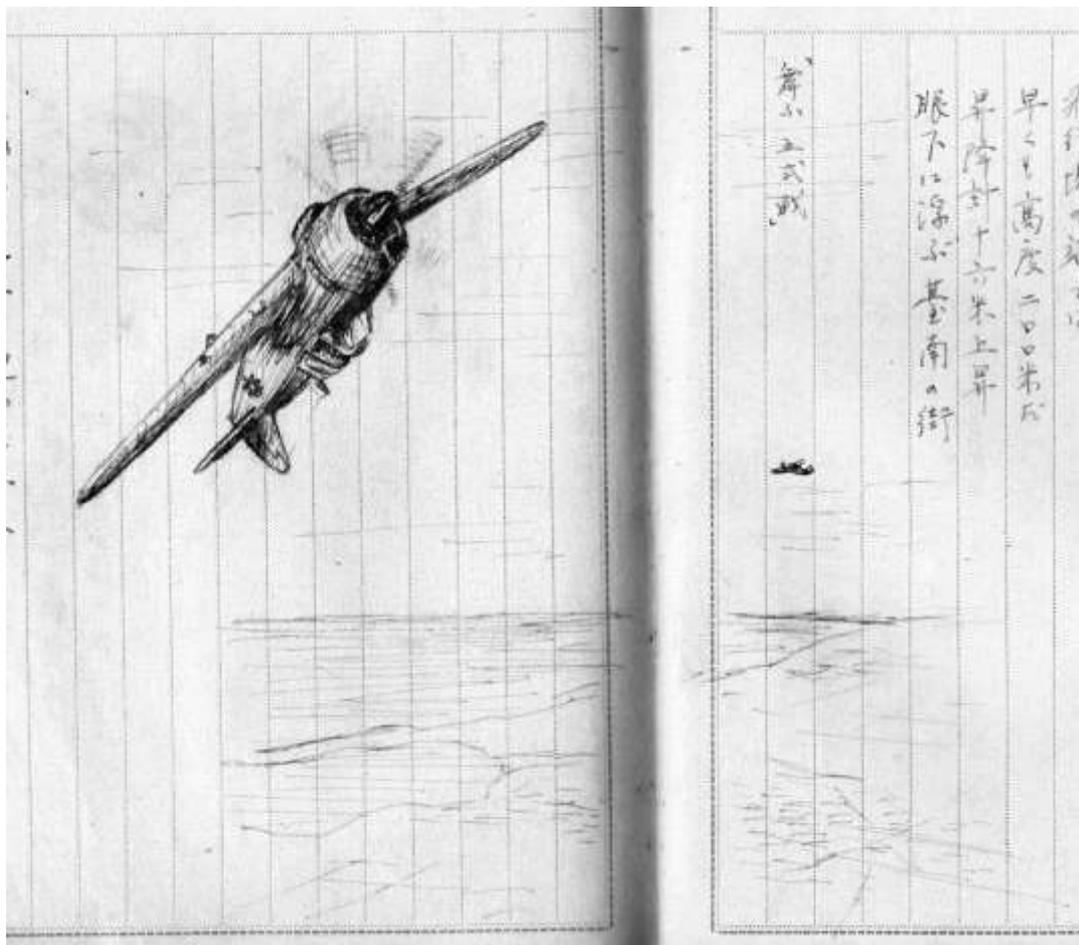
回転二六〇〇 ブースト^{〔プラス〕} 二〇〇^{ノット}耗

飛行場の^{はし}端では

早くも高度二〇〇^{メートル}米だ

昇降計十六米上昇

眼下に浮ぶ^{たいなん}臺南の町



「舞ふ五式戦」

¹⁰² 注：五式戦 - 五式戦闘機、キ 100

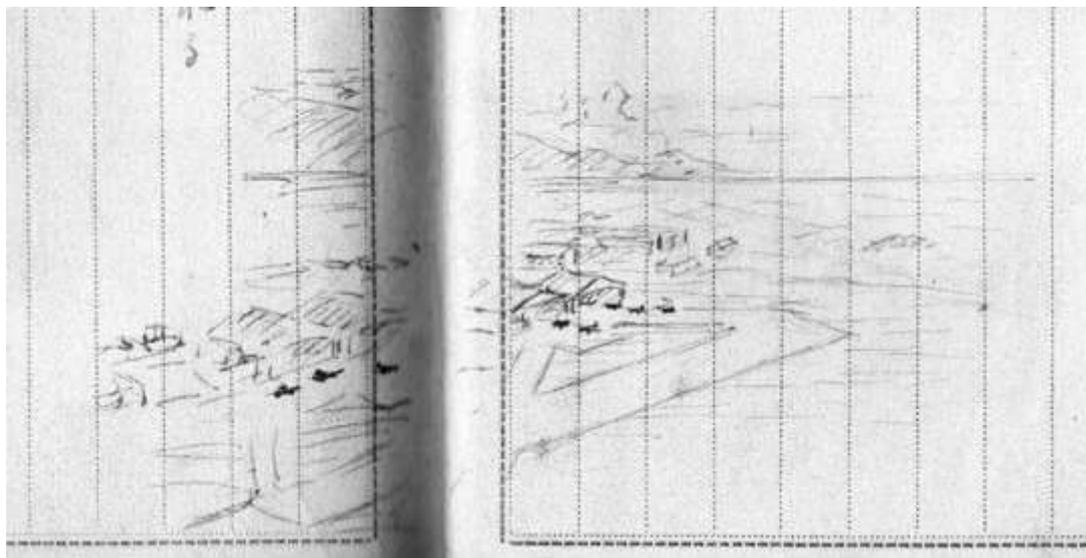
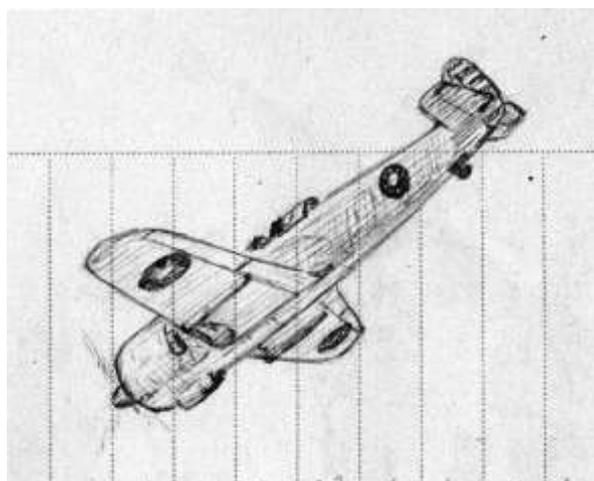
飛燕のエンジン製造遅延のため飛燕機体をベースとしてエンジンを空冷式に変更

あきつて 明後日に元旦を迎ふとは言へ
亜熱帯の日射は春霞みを棚引かせてゐる
上昇 又上昇
東支那海を眺めつゝ
連なる脊陵山脈を眺めつゝ
千米 千五百米 美しい大空よ
あゝ 之が我が操縦桿をとる最後か
中国空軍へ 伝習教育の
今日は最後の試験飛行
翼は既に青天白日のマークだが
之ぞ俊鋭 キ100戦闘機
大空に対する最後の熱情は
此所数分間で終るのだ

舞へよ 此の翼
躍れよ 此の翼
我が一生の愛を捧げたお前よ
最後の舞踏だ
十分に惜しみなく躍れ



青天白日



急降下、超低空
急上昇、急上昇旋回
地面が廻る
地平線が消える 又現はれる
縦になる、又廻る
頭の上で地面がちらつく
遠心力に 眼の前が霞む
おゝ 素晴らしい性能よ
舞へ、躍れ、南台の日射に
その銀の翼を輝かせて
お前も日本人の手と之で別れるのだ
静かに機首を下に向けて
四〇〇呎、五〇〇呎、五五〇呎、急上昇
忽ち五〇〇米余も駆け上って
ひらりと身を翻へし
地面めがけて真逆様
つと身を起こすと
草の葉を戦のかせつゝ
快速の超低空
上昇、背面、降下
見よ翼端迄 血が通ってゐる
此の旋回 此の上昇
だが之が最後なのだ
名残はつきねども
何時迄も一緒には居れぬ
さあ降りやう
最後の着陸だ 心を籠めて
二〇〇呎、一八〇呎、一七〇、一六〇
滑走路の端が眼の前に来る
ピタリと滑走路の軸線に沿ふて
一五〇、三米、二米、一米、
最後の操縦桿の一引きに
フハリ車輪に柔かいショック
あゝ五年間の我が夢も
今此処に覚めるのだ
さらば愛機よ 永遠の袂別ぞ



台南空港 Google Earth より



5式戦 Wikimedia Commons より

懐^{なつか}しいピストの空気を
しみじみ^{あじわい}と味はひながら
再び此の楽しい気分^こに
浸^{ひた}り得ぬことを思^{おも}へば
戀人^{こいびと}に別れていく様^{よう}な たまらない胸の痛み
否、お前こそ至上^{こいびと}の戀人よ
我が思^{おも}ひの総てを吸^い取しめたりし
大空よ、愛機よ
何時か又 我がもとへ帰^かって来て呉れ
俺はただそれのみを希望^{のぞみ}にして生きて^いる

昭和二〇年十二月三〇日



台湾での足跡

後記

忘れざる為に書き残す

昭和(西暦)月日

11(1936).4.1	東京陸軍幼年学校入校	注: 13歳
13(1938).12.1	陸軍予科士官学校入校	注: 15歳
14(1939).12.1	陸軍航空士官学校入校 (航士55期)	注: 16歳
17(1942).3.27	同校卒業 同日付見習士官の階級に進む 同日付補飛行第33戦隊附	注: 19歳
17(1942).3.28	陸軍少尉に任ず	
17(1942).4.5	明野陸軍飛行学校乙種学校に分遣	
17(1942).9.13	補飛行第78戦隊附	
17(1942).9.23	明飛校乙学修了	注:明野飛行学校
17(1942).10.8	飛行第78戦隊着隊(満州 孫家)	
18(1943).3.1	任陸軍中尉	注: 20歳
18(1943).4.6	機種改変の為 明飛校に到着	
18(1943).6.15	南海派遣の為 明飛校出発	
18(1943).7.2	比島「メナド」、「ニューギニア」を経て「ラバウル」着	
18(1943).7.14	「ウエワク」に転進	
19(1944).3.11	戦傷(「ウエワク」にて療養)	注: 21歳
19(1944).3.15	部隊「ホランジア」に転進(負傷の為 残留)	
19(1944).4.3	米軍「ホランジア」上陸	
19(1944).5.12	帰国命令により「ウエワク」より「ミティ」に帰還	
19(1944).6.2	「マニラ」第一陸軍病院に入院	
19(1944).6.30	同院退院	
19(1944).7.15	「マニラ」航空保健所入所	
19(1944).8.14	同所出所	
19(1944).6.24	補明野教導飛行師団司令部附(8.14受命)	
19(1944).8.21	「マニラ」発 8.24 明飛着	
19(1944).12.1	任陸軍大尉 9/22→11/30 乙学教官 12/1→1/31 甲学	
20(1945).1.30	補飛行第17戦隊附	注: 22歳
20(1945).4.22	花蓮港着(台湾)	
20(1945).6.15	宜蘭転進(台湾)	

20(1945).6.28	八塊転進(台湾)
21(1946).2.27	鹿児島にて復員

記録

注：敵機 撃墜・撃破

<>は撃破

18(1943).8.7	B25 2機	ツルヴ(Tuluvu)沖
18(1943).12.9	P40 1機	マダン(Madang)沖
19(1944).1.15	P38 1機	マダン西方
19(1944).2	P38 1機	ウエワク(Wewak)東方
19(1944).2	B24 1機	ブーツ(But)沖
19(1944).3.11	P41 1機 <1>	ウエワク沖
20(1945).1.14	B29 1機	名古屋東方
20(1945).1.19	B29 <1>	名古屋上空

注：事故・破損

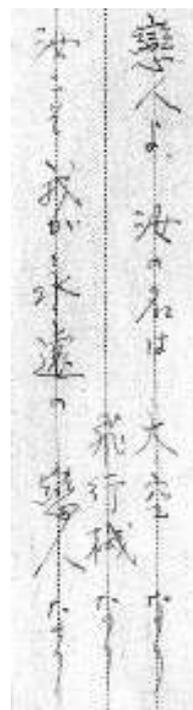
年月日	場所	状態	原因	機種
18(1943).6	明野飛行場	小破	ブレーキ破損	三戦
18.8.7	グンビ付近 不時着	大破	燃料切れ	三戦
18.11?.12? ^(原文ママ)	ウエワク飛行場内 不時着	無事	被弾4発	三戦
18.12.18	ツルヴ旧飛行場内	無事	発動機故障	三戦
19(1944).2	ウエワク飛行場内	無事	被弾1発	三戦
19.3.11	ウエワク東方	落下傘降下 炎上	被弾1発	三戦
19.10	佐野飛行場	小破	ブレーキ故障	一戦
19.12	明野飛行場	大破	脚故障	四戦
20(1945).2.27	富高航空隊(失神)	大破	発動機故障	三戦

修習機種

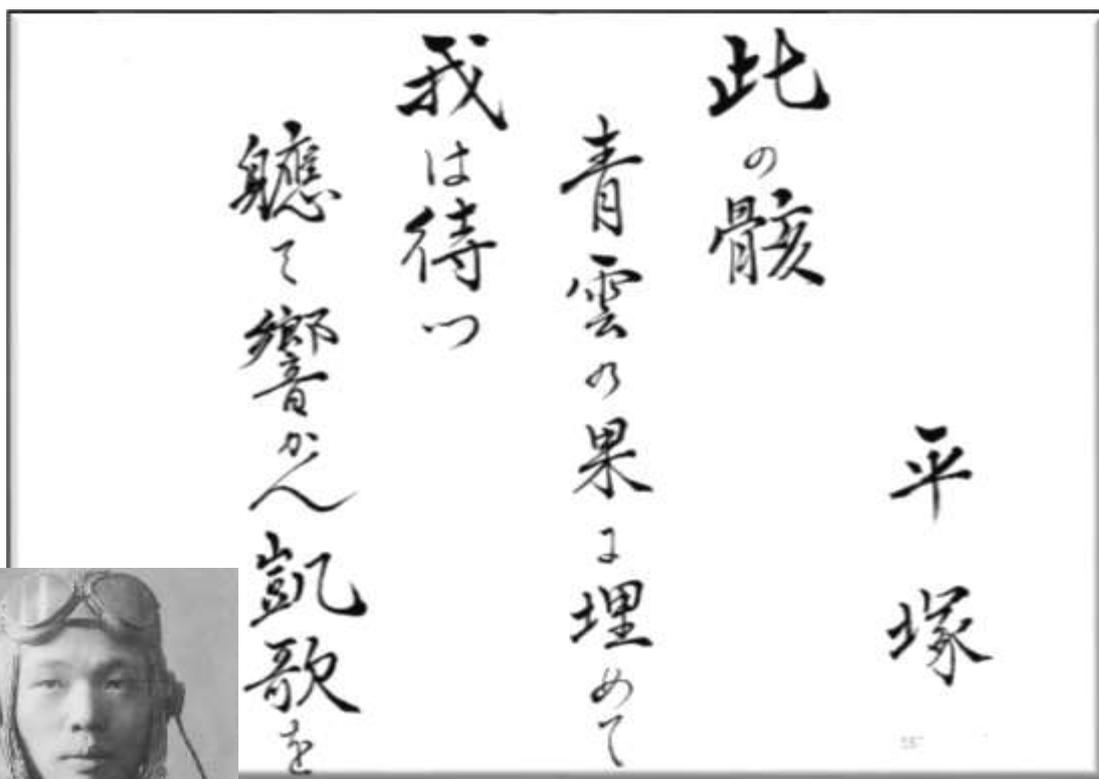
九五式練、九九式高練、九七式戦、九七式軽爆

一式戦 三式戦 四式戦 五式戦
キ 43(隼) キ 61(飛燕) キ 84(疾風) キ 100

こいびと 戀人よ なんじ 汝の名は 大空なり
飛行機なり
なんじ 汝こそ わが永遠の こいびと 戀人なり



—手記終—



航空士官学校 55 期 留魂録より



こ むくろ せいうん はて うず
此の骸 青雲の果に埋めて
われ ま やが ひび かちどき
我は待つ 聴て響かん凱歌を

編集後記

平塚勝 略歴

大正 12(1923)年 1 月 5 日	平塚 勇・チヨの三男として宮城県刈田郡白石町(現白石市)に生まれる。 本籍地 福島県北会津郡町北村(現会津若松市町北町)
昭和 18(1943)年 6 月 ～昭和 20(1945)年 12 月	手記本文 後記・記録 参照
昭和 27(1952)年 1 月	芥生(あざみ)登美子と結婚
昭和 29(1954)年 11 月	航空自衛隊第 3 期特別幹部学生として幹部学校入隊。 (31 歳)
昭和 30(1955)年 11 月	T6 教官コース修了。その後第二操縦学校教官
昭和 31(1956)年 6 月 26 日	T6 訓練機で編隊訓練中に宮城県伊豆沼(現栗原市)に墜落。殉職。享年 33 歳。従六位および勲六等に叙され瑞宝章を授与されるとともに、3 等空佐に特進。

参考資料

- 光人社 三浦泉著 少年飛行兵「飛燕」戦闘機隊 若干 15 歳パイロットの青春譜
光人社 小山進著 あゝ飛燕戦闘隊 少年飛行兵ニューギニア空戦記
文春文庫 渡辺洋二著 液冷戦闘機「飛燕」
ニューギニア飛燕会編 第 14 飛行戦団部隊史誌
陸軍飛行戦隊史刊行委員会 鈴木正一著 蒼穹萬里：陸軍飛行戦隊史
端午会編 端午之群像
陸軍航空士官学校史刊行会 陸軍航空士官学校
航空情報別冊 日本陸軍戦闘機隊
ラバウル・ニューギニア陸軍航空部隊会 幻(まぼろし) ニューギニア航空戦の実相
学研 太平洋戦史シリーズ Vol.61 「三式戦『飛燕』・五式戦」
丸 2017 年 1 月別冊三式戦闘機「飛燕」
New Guinea The U.S. Army Campaigns of World War II
https://history.army.mil/html/books/072/72-9/CMH_Pub_72-9.pdf

写真集

飛燕

2017.11 かがみはら航空博物館

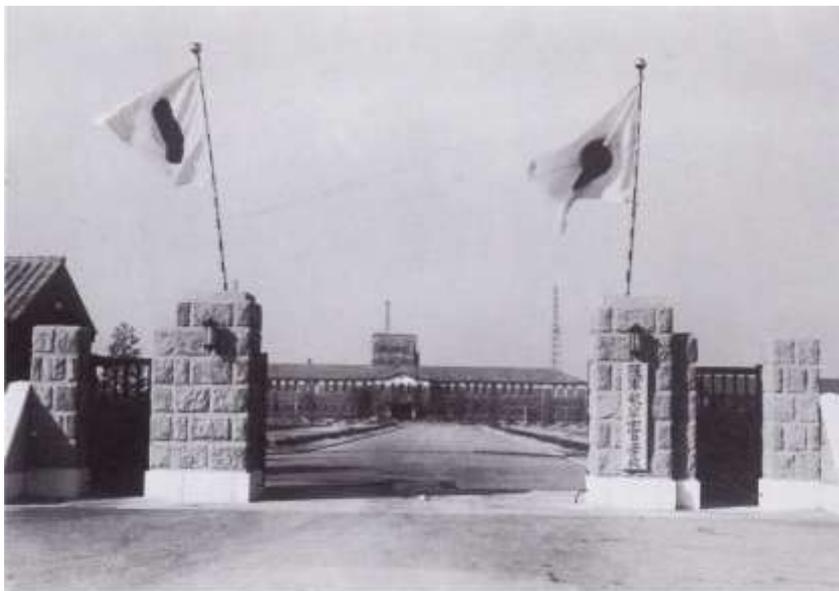




修武台記念館(航空士官学校跡、現航空自衛隊入間基地内)

現航空自衛隊入間基地は昭和 13(1938)年に陸軍航空士官学校として開設され、昭和天皇から「修武台」の名前が与えられた。

第 2 次世界大戦後には米軍がジョンソン基地として管理、昭和 38(1963)年空自へ移管。



「陸軍航空士官学校」より



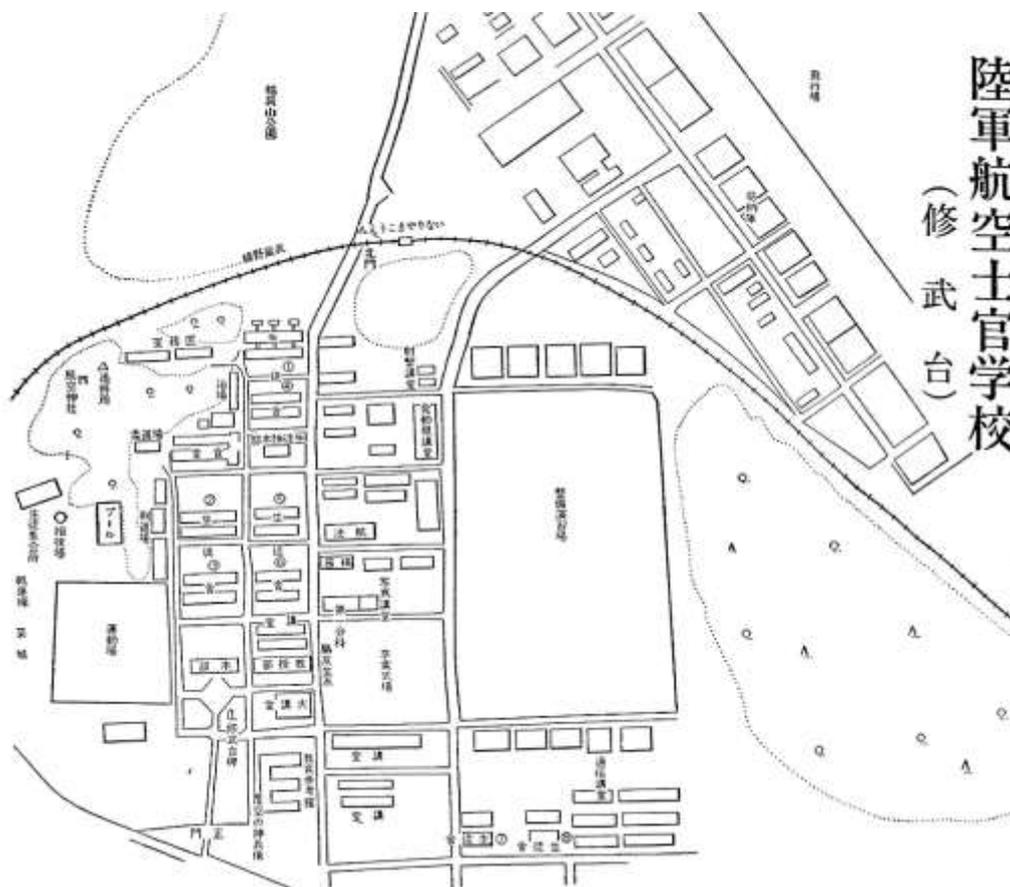
旧航空士官学校本部跡。現修武臺記念館。



航空神社跡の碑

航空兵の像

航空神社は下地図左上、現東京家政大学内にあった。



陸軍明野飛行学校(現陸上自衛隊明野駐屯地)



飛行学校正門

忠魂碑



【現】将校集会所は写真右奥
2017年12月撮影



【旧】現在地から 50m ほどの場所

将校集会所



2017年12月撮影



飛行第78戦隊 明野出発の将校集会所前での将校集合写真 昭和18(1943)年6月

前列向かって左から5人目が戦隊長 高月光少佐

向かって右端は荒鷲像の台座。荒鷲本体は撤去されている。

注： 参考資料 「第14飛行船団部隊史誌」 p.5 の写真は左右逆転

ウエワク



左 : New Guinea Campaign: Allied Air Operations Lae-Salamaua - Restored 1943

右 : Boram (ウエワク東飛行場) 1943年9月9日撮影 Pacific Wrecks より

p. 11 「防空壕にて」の下段写真 B-25 raid(p. 11)は地形的に'WEWAK'文字のあたり、と想定



1943年8月17日

ウエワク東飛行場

連合軍襲撃時の様子

Youtube Mission to Rabaul Nonstop action in the South West Pacific 1943

7分30秒過ぎからの画像

・参考資料(p. 47)「幻」185頁、8月17日の襲撃について：

‘このように早朝から押しかけてきた例はこれまでにないことだった。虚をつかれた日本側は、戦闘機が邀撃に飛び立つ機を失し、高射砲など対空砲火の対応さえも遅れてしまったのである。…

ウエワク、ブーツ地区の出動可能機数は、…78戦隊(「飛燕」)…に至っては1機もないという、なんとみじめなものになってしまった。…滑走路は…百数十カ所の大穴をもってあばたづらにされたしまったのである。

実のところ、…敵が襲撃する20分ほど前に「ハンサ上空、敵中型機大編隊通過」という監視哨からの情報を得、直ちに6、7両飛行師団に電話連絡をしようとしたが、故障のため通じなかった。’

平塚 勝



1937年 (14歳)



少尉 (19歳)



遺書



ながねん わた ごじあい ただただかんきゆう いたり ごぞうろう
永年に互る御慈愛の程 唯々感泣の至に御座候

こうよう おつく もうしわけ
何の孝養も御盡し出来ず？ 誠に申 訳も無く候

おおきみ さき たてまつ み おんたて ごばぜん うちじに むじょう こうえい そうらえ
大君に捧げ奉りし此の身 御楯となりて 御馬前に討死するは無上の光榮に候へども

また おおぞら ゆ はつてん いしづえ
又 大空を征く者として 航空發展の 礎 となりて

これまた こ しあわせ
職に殉ずるも 之又 此の上なき 幸と存じ居るゆえに？

なにとぞ およろこび ねがいあげたまつりそうろう
何卒 御喜下さります様 願上 奉 候

いえど ほか
死と雖も生に外ならず

ことな せいべつそくしべつ
家を遠く離れあると何の 異ること無く 武人として 生別即死別と存じ候

おんふところ
勝は永遠に 父上様 母上様の 御懐の中に 在り候

さきもり よろこび
大君の御為に 防人として 大空を征く無上の光榮・喜・

むくる せいりん はて うず
此の骸 青雲の果に埋めて

やが ひび かちどき
我は待つ 聴て響かん凱歌を

いか じゆん
勝は 如何なる場合にも喜んで 國に空に 殉じ行き候

ゆ
子として 親に先立ちて逝くとも 決して不孝とは存じ申さず

おわらい おかお はて いたしお
「よく死んだ」と御笑ひ下さる その御顔を 勝は空の果より拝むを 楽しみと致居り

きわみ
誠に長き間 有難き極に候

なにとぞ いのりたたまつりそうろう
何卒 勝の死後も大君の御為に 日々を御送り下されんことを祈 奉 候

再拝

勝

御両親様



1954年(31歳)



妻・登美子さんと

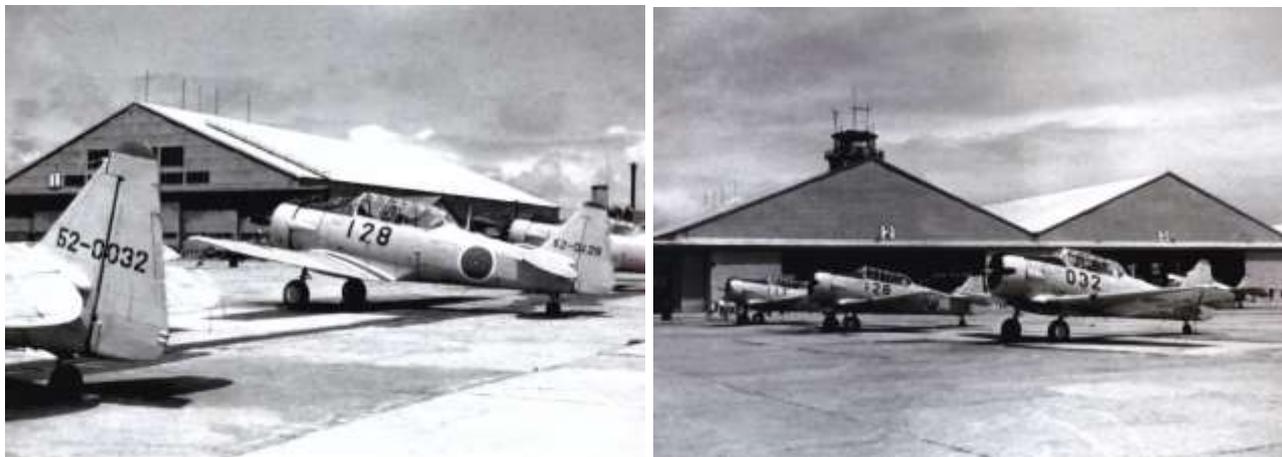


浜松基地にて Fuji T-34A Mentor 51-0331 機 1955 年撮影

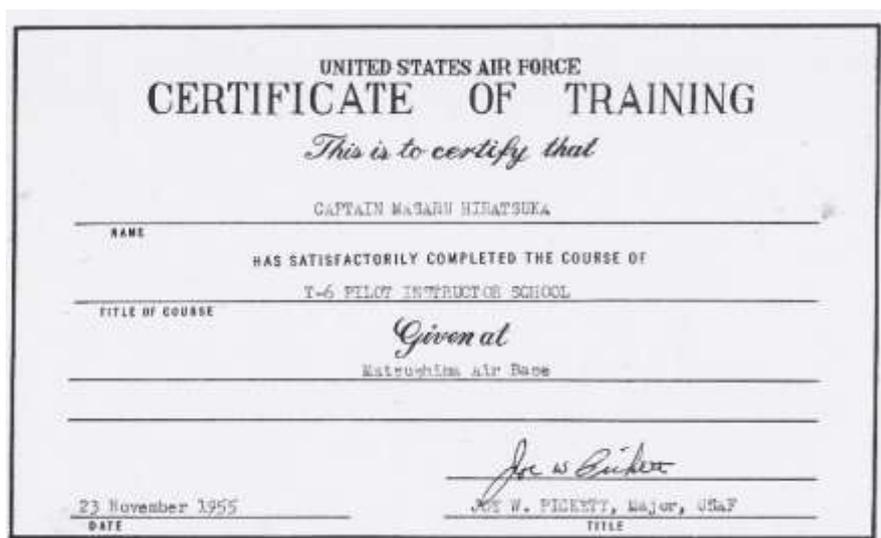


T-34A Mentor 51-0331 機 於航空自衛隊奈良基地 2018 年 4 月撮影

上段の浜松基地での写真と同機と思われる



航空自衛隊松島基地 第2操縦学校



T-6 操縦教官トレーニング修了証書

事 故

★ 自衛隊の T-6 練習機空中衝突
6月26日午前8時30分ごろ、
宮城県栗原郡若柳町畑岡の伊豆沼上空を航空自衛隊松島第2操縦学校
(同県桃生郡矢本町)のT-6中間練習機4機が高度約2,000mで練習
飛行中、接近して飛行中の52-0205
号機(同校教官平塚勝1等空尉操縦)
と52-0016号機(同、竹内慶文1等
空尉操縦、乗員は両機とも操縦者1
名のみ)の2機が衝突、平塚機は火
だるまとなって若柳町畑岡田袋付近
の水田に、また竹内機はキリモミ状
態になって追町新田字蒲付近の水田
にそれぞれ墜落、搭乗の両教官は即
死した。原因その他は目下調査中。
訓練中の空中衝突事故は航空自衛隊
最初のことである。

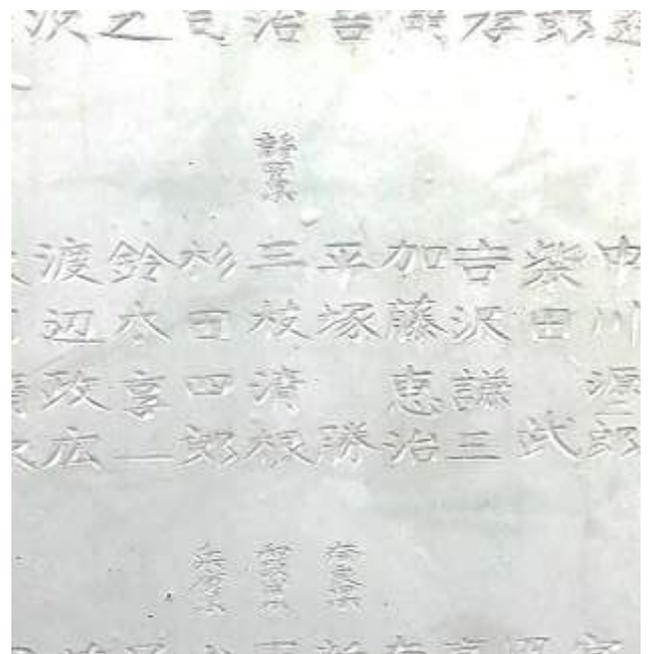
航空情報 1956年8月号



T-6 Texan



神戸護国神社第14飛行団、飛行第68/78戦隊慰霊碑



慰霊碑銘板



第二操縦学校葬 1956年6月28日



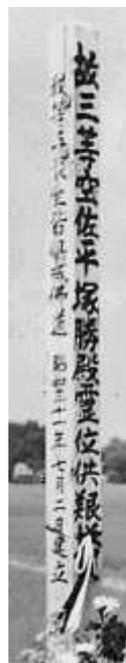
知空理勝居士



北部航空方面隊の部隊章



1956年8月13日 両親、妻・登美子さん



故三等空佐 平塚勝殿 霊位供養塔
我等与衆生皆俱成佛道 昭和三十一年七月二日建立



霊碑除幕式 母親 プロペラは当初石碑の上



事故慰霊碑 宮城県栗原市 左:平塚勝 3等空佐 右:竹内慶文 3等空佐



出典: インターネット航空誌雑誌ヒコキ雲

A2330-4 宮城県栗原市(旧栗原郡若柳町) T-6 墜落殉難之碑

<http://hikokikumo.net/a2330-04-HiratsukaIasibumi.htm>

竹内義文 3等空佐

航士 56 期。第 48 飛行場大隊付、第 101 教育飛行連隊付、第 19 教育飛行隊等を歴任。

昭和 29(1954)年 11 月第 3 期特別幹部学生として入隊、課程修了後操縦学校所属、操縦教官となる。



1986年6月26日(事故30周年)



平成29(2017)年 松島基地 時藤司令による慰霊

栗原支部が空自殉職隊員の慰霊碑清掃と慰霊祭に参列

栗原支部（支部長 佐藤隆一）は、7月12日に栗原市若柳畑岡の伊豆沼湖岸にある故平塚勝3空佐、故竹内慶文三空佐二人の殉難の碑の清掃を支部長以下3名で行った。この碑は昭和31年6月に航空自衛隊松島基地所属の練習機による飛行訓練中の事故で殉職された2名の隊員を慰霊するため、事故当時にご遺体や機体の収容に協力頂いた地元消防団員や有志の方々の善意と浄財により建立されたものである。

7月17日には、航空自衛隊松島基地司令松尾洋介空将補、地元で碑を管理して来られた高橋まさ子氏、今回初めてとなった千葉健司栗原市長等の参列を得て慰霊祭が執り行われた。栗原支部からは佐藤隆一支部長以下5名の会員が参列した。参列者一同、今後も慰霊碑の供養を継続・継承していくことを誓い合った。

（栗原支部長 佐藤隆一）



2018.07.17 慰霊祭の状況

2018年7月17日慰霊祭

公益社団法人 宮城県隊友会ホームページより



2019年6月25日慰霊祭

新慰霊碑 最後に離陸した松島基地を向いている。



除幕式・入魂式 令和 2(2020)年 4 月 4 日

慰霊に来てくださる航空自衛隊松島基地の方々と
慰霊碑を守ってくださる地元の方々に感謝！

平塚 勝君(航912) (予613)



御遺族 横須賀市坂本町
平塚 登美子(妻)

△平塚勝君のこと▽

池上洋吉

私は東京幼年学校で彼と同学班、同運動班であった。彼は仙台一中の一年生から来た筈である。一年生から来たとはいえ図体は一番大きな部類であった。顔は童顔そのものであった。彼はどちらかといえば、不和雷同は好まず、孤立的な傾向であった。その当時、私達の間で使われていた言葉「アイツはスカしている。」に相当するポーズをとることが多かった。これは相手を無視するとか、超然としていたりとかのキザな態度をとることを意味した。彼は仲々の自信家であったことは否めない。私は彼とは割合、うま、があった方

ある。

兵科志願で航空に進み、同じ戦闘隊に入った。戦地において会ったのは昭和十八年二月、ギニヤのウエワクであった。私は二十四戦隊で単I型、彼は六十八戦隊で飛燕であり、期待された新鋭部隊であった。間もなく私は敵にやられて負傷し、野戦病院に入院、内地に帰った。この間、彼は来襲するP38、B24を相手に大活躍をし輝しい戦果を挙げたのであるが、或る日敵弾を受けウエワク附近の海中に落下傘降下し救助されたことを聞いた。

終戦直前は私は台湾の宜蘭に、彼は十七戦隊に加わり、同じ台湾の童潭に居て最新式の五式戦闘機に乗っていた。こちらが訓練をしているとよく五式戦でやって来て対地攻撃等をして派手な所を見せびらかせ、私達をうらやましがらせたものであった。

航空自衛隊が創設されると聞いて彼と話し合い一緒に練馬に行き試験を受けた。例によって彼は自信たっぷりであった。採用通知が来たのは私の方が早くて彼の所へは仲々来ないのでやきもきしていたが、結局私が二期で、彼が三期で入隊した。

メンター、T6と課程が進んだが、誰しも米人の教官に習うので英語で苦労した。しかし彼の操縦技術は技師であったので英語の不十さを十分カバーしたらしい。当時、ベル大尉という極めてうるさい教官がいて誰もが彼を敬遠していたが、彼はこのベル大尉の計器

飛行のチェックで優秀という「評」を貰った。そうであるから驚きであった。

彼はずっとT6の教官をしていたが、基地の航空機でT6の編隊アクロバットをやるのと計画した。これが若干無謀であったかも知れない。その練習中に僚機と接触してあたら若い青春を散らしてしまったのである。それからもう十年以上が過ぎてしまいいちちらも白髪頭になってしまった。

あの自信に満ちた彼の風貌英姿に永遠に接し得ないのはほんとうに心残りである。

池上洋吉氏

航士 55 期。飛行第 24 戦隊所属

航空自衛隊 空将補、

第 8 航空団飛行群司令、第 11 飛行教育団司令 兼

静浜基地司令、第 2 航空団司令 兼 千歳基地司令

を歴任。1975.7.1 退職。2010 年 4 月 26 日没。

恋人よ 汝の名は 大空なり
飛行機なり
汝こそ 我が永遠の 恋人なり

—平塚 勝—



T-34A メンター 51-350 機 51-331 機より 1955 年撮影

叔父 勝と戦友、ならびに戦争で亡くなられた方々の冥福を祈りつつ 2017 年 9 月